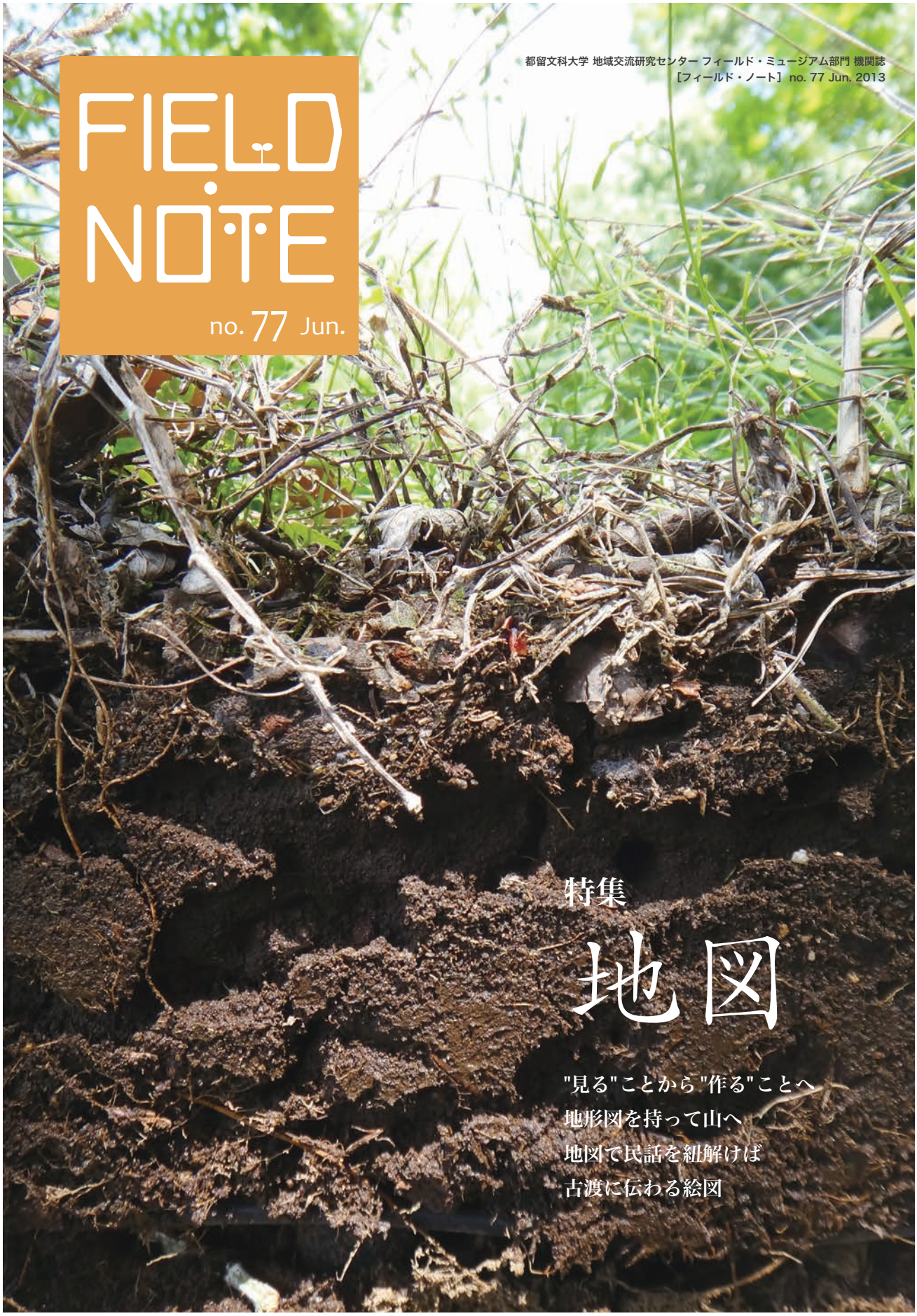
都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
［フィールド・ノート］ no. 77 Jun. 2013

FIELD NOTE

no. 77 Jun.



特集
地図

"見る"ことから"作る"ことへ
地形図を持って山へ
地図で民話を紐解けば
古渡に伝わる絵図

FIELD·NOTE
no. 77 Jun. 2013

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

CONTENTS

特集
04 地図

06 "見る"ことから"作る"ことへ

08 地形図を持って山へ

12 〔コラム〕
歩いて、探して、見つけた地図

14 地図で民話を紐解けば

18 見聞ノート
古渡に伝わる絵図

22 本と資料の紹介

23 地図を折りたたんで

タンポポを掘る（34 頁より）

24 はるちゃんの都留生きもの図鑑　第 4 弾
春を告げるビロードツリアブ

26 フィールド・ミュージアムのたのしみ　第 20 回
谷の町・史の里　谷村にあった映画館のこと③
「ヒロバ」での遊び —その後の「谷映」（2）—
カヤネズミの楽園をつくる

30 フィールド暦

31 センサーカメラが写した動物たち

32 つるりん 春

34 春の一杯
—タンポポコーヒーを味わう—

36 旧 5 町村を巡る（5）旧盛里村
蚕の神様を祀る蚕影山

38 起き上がる朝　第 7 回
—女学校へ行くまでの経緯—

42 富士道を歩く 2013

44 フィールド・ノート ニュース

46 編集後記

表紙写真「アリの巣発見！」
ビオトープでプランターの土を入れ替えているときに見つけました。本物のアリの巣を横から見たのは初めてです。壊してしまうのはかわいそうなのでそのまま戻しておきました。（砂田真宏）

特集

地図

土地のようすを知りたいとき
とある目的地へ行きたいとき
活躍するのが地図――。

世界地図や日本地図
住宅地図や案内板など
その種類はじつにさまざまある。

でも、地図はあくまでも脇役。

目的を達成するための
手段で終わってしまうことが多い。
そこで今回は
脇役から主役へと視点を変えてみる。
見えてくるのは
都留のどんな姿だろう。
地域をもっと深く知るための視点として
「地図」と向き合ってみる。

大学の北西に、地元の人から「ドウジ道」と呼ばれる畦道（あぜみち）がある。脇には護岸工事のされていない昔ながらの水路が流れ、田畑に通う人たちが多く往来する。
昭和４年測量の都留市の地図を見ると、現在住宅街になっている大学周辺は一面の田園地帯だったことが分かる。ここ「ドウジ山」（道路山）のふもとは、当時の面影を残す数少ない場所だ。

"見る"ことから "作る"ことへ

生きものの地図を作ることは、地域に親しむひとつの方法。
生きものの情報を示し、「価値観」や「物差し」になる地図。
見るだけの地図から、自分で作り上げていく地図へ。

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真

地図は一般的には見るものです。目的の場所に行くための経路を調べたり、世界地図を広げてアラスカとかサハリンがどこにあるのかを確認したりします。いっぽう、市内の巨木マップとか、ツバメの巣マップなどは自分で作ることのできる地図です。このような生きものの情報を地図上に示したものを「生きもの地図」といいます。

例を挙げましょう。大学の周辺を歩きながらセイヨウタンポポが咲いている場所を調べるとします。何回か調査をすると、セイヨウタンポポの生えている場所がわかってきます。この結果を地図上にまとめると、セイヨウタンポポの地図の完成です。

ほかには、キセキレイは谷や沢、川の近くでしか目にしないとか、西日本にはオナガがいないとか、本州だとシラカバやミズナラは標高１０００ｍ以上の場所から多くなるなど、経験的に知っていることもあるでしょう。こうしたことも、生きもの地図としてあらわせます。

ここでは、わたくしが約10年間に都留市内で観察した生きものを紹介します。多くの場所で観察されるヒヨドリなどではなく、そこにしかいない、あるいは、ある特定の場所に多い生きものを対象としました。

まずはヒバリ。30年くらい前には市内に多数生息していたようですが、現在は数箇所でしか見られません。なぜなのでしょうか。小形山（おがたやま）の農耕地では、春から夏にかけてまだヒバリのさえずりが聞かれます。

十日市場を流れる桂川の右岸には、地元のかたが「すりばち池」と呼ぶ場所があり、毎年4月上旬に多くのアズマヒキガエルが産卵に来ます。すりばち池のすぐ近くを桂川が流れているので、左岸からは産卵に来られないでしょう。左岸側に住んでいるアズマヒキガエルの産卵場所もどこかにあるはずですが、すりばち池のような場所は見つかっていません。

それから、市内で10種類以上の水鳥が観察できるのは川茂（かわも）だけです。川茂には発電所に桂川の水を取り込むためのダムがあり、部分的に川の流れが緩やかになっています。そのため、カモ類やサギ類などの水鳥が見られます。

市内をいろいろと見てまわると、あそこに行けばこんな生きものがいる、あの生きものを見るにはここに行けばいい、ということがわかってきます。アオサギのように、数年前に鹿留（ししどめ）川の近くの集団繁殖地が消滅してしまったものもいますし、市内でガビチョウが観察されるようになったのはおよそ20年前からとのことです。

見ることから、作ることへ。生きものの地図を作ることは、地域に親しむひとつの方法です。ヒバリが少なくなった原因を探るには、ヒバリの調査以外に地域のかたへの聞き取りが欠かせません。

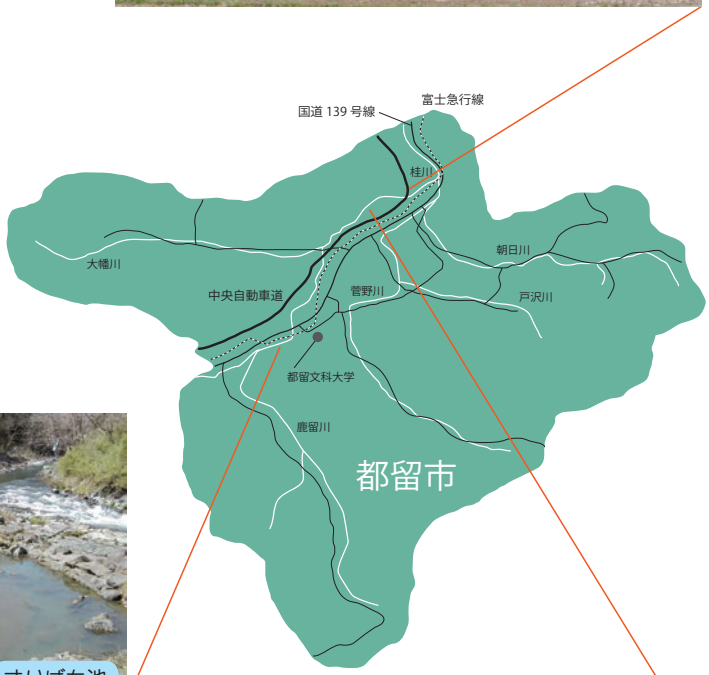
体験を通して物事を理解することは大切です。なぜなら、世界を知っていくためには、自分のなかに地図を持つ必要があるからです。生きものの地図から地域を知る。この地図は、新しい出来事があるたびに更新され、その人の価値観や物差しとも呼べるでしょう。

地図

ヒバリ。飛びながらさえずる

市内ではおよそ 20 年前からガビチョウが見られるようになった。下草の多い低木林や河川敷のヤブなどに生息する

アズマヒキガエルの卵塊



地形図を持って山へ

地形図をどう利用すればいいのか、じっさいに読みとりながら歩けるのか……。そんな編集部でのやりとりをきっかけに、地形図を持って歩いてみたくなった。

前澤志依（国文学科４年）＝文・写真
『フィールド・ノート』編集部＝写真

まだ都留の山を登ったことがない、都留のまちを高いところから見てみたい。そんなことを理由に、山に焦点をあてた。今回は、初心者も登りやすいという、大月市と都留市にまたがる標高９７５ｍの高川山を目指す。ＪＲ中央線 初狩駅から登りはじめ、富士急行線 禾生駅に向かって下山するルートだ。２万５千分の１地形図（国土地理院、平成７年６月１日発行）を携えて編集部の５人で登る。

４月13日、午前９時32分、出発地点の初狩駅に到着。からっと晴れたこの日は、それほど暑くもなく、絶好の登山日和だ。天気が良いと高川山からは富士山を望めるらしいので、期待が高まる。地形図で高川山の位置を確認し、さらに自分の目でどれが高川山なのかを把握する。いざ、山頂を目指して出発だ。

初めて歩く道なので、迷わないように地形図上に記されている建物や田畑などを探しながら進む。じっさいに探していたものを見つけると、地形図通りに進めているという確信がもてる。

ふだん道を歩いていてもまわりにはどんな景色が広がっていて、なにがあるのかを細かく意識することはなかった。でも、地形図を持って歩くことで、じっくりとまわりのものを見るようになり、民家ひとつをとってもどういうふうに並んでいるのかまで見るようになった。

地形図を頼りに歩く

10時５分、コンクリートの道が、砂利道へと変わった。地形図には高川山の中腹まで林道が記されている。現在地から推測すると今は林道を歩いているようだ。どのように進んでいるのかも意識して歩いてみると、地形図に記されている林道をなぞるようにして自分の足もその通りに動いていた。

自分たちがいる位置よりもさらに

地図

右：地形図に現在地点を記していく

左上：ヒトリシズカ。花穂がひとつだけつくことから名づけられたことを教えてもらった。ほんものを見ながら草花の名前を知っていくのも楽しみのひとつだ

左下：リスが食べたと思われるクルミの食痕。高川山にもリスが暮らしているようだ

低いところに、沢があるのを見つけた。地形図でも等高線が標高の低いところから高いほうへ向かってへこんでいる場所が続いているのを確認できたので、谷間のきわを歩いているのがわかる。谷間には沢が流れているところと、枯れているところとがあった。それでも沢の筋は山の奥まで続いている。しばらく沢沿いを歩いていった。

地形図を読みとる

地形図に記されていた林道が終わり、ゴツゴツした石や大木の隙間を人が踏み固めてできた道になった。地形図の等高線の間隔も狭くなっている。ここからは急な傾斜が続くようだ。気合いを入れて登っていく。

土が乾いていたのと傾斜が急なのとで足下は滑りやすく、一歩ずつを注意して歩かなければ危険だ。だからといって足下ばかり見ていると、何度か歩いている道から外れて違う方向へ行きそうになった。足下に気をつけながら、進行方向を見て歩くのはなかなか難しい。

舗装されていた道を歩いているときよりも、山の自然が近くにあった。倒木に咲いた満開の花からは強い生命力が感じられた。また、リスが食べたと思われる食痕を見つけたり、一緒に歩いていた砂田さんがリスを目撃したり。しばらく立ち止まって生きものが近くにいないかと、みんなで木々や草花をじっと観察したときもあった。山のなかの自然と向き合う機会があまりなかったので、木々の変化や生きものがいた跡を見ることが新鮮で、それらを探すこともひとつの楽しみになっていた。次は何に出会えるだろう、と期待しながら進んでいく。

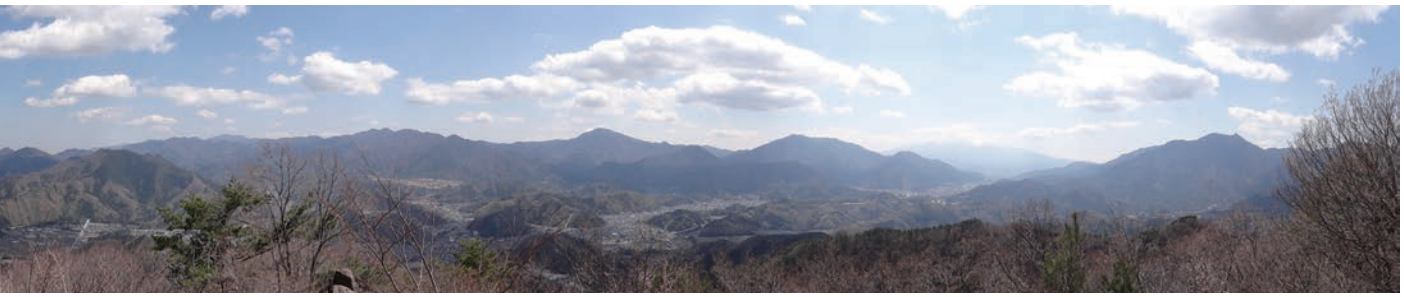
登り続けると、尾根を歩く道に変わった。等高線が谷間とは逆に、高いところから低いほうへ向かって出っ張っている場所が続く。尾根の道では木々の間からまち並みの一部や、今まで見えていなかったほかの山の姿も見えるようになってきた。山頂まであと少しだ。休憩をこまめに挟みながらさらに急になった斜面を、一歩一歩力をこめて登る。

尾根を歩く。頂上ではどんな景色が見えるのだろうか

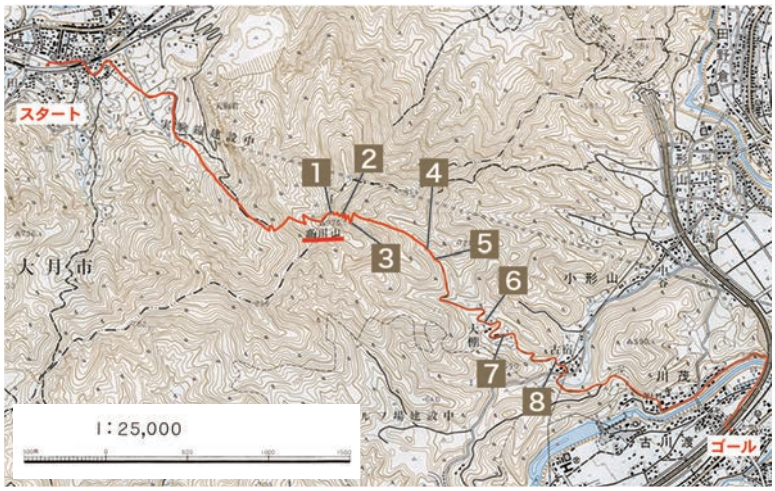
ついに山頂へ

12時7分。ついに山頂へ到着。無事に登りきった喜びと広々とした空間に出られた開放感でいっぱいになった。このとき食べたおにぎりは格別においしく、疲れきった体を癒してくれた。

山頂からは高川山の麓のまち並みやまわりの山々がぐるりと一望できた。出発する前に地形図で都留のまち並みを見たときには、山間に民家が多くあるなあ、とまち並みをぼんやりと想像するだけだった。じっ



高川山の山頂から見た景色。写真中央にあるのが本学周辺。右には富士山が見える



地形図で見る今回のルート。2万5千分の1地形図（国土地理院、平成7年6月1日発行）を使った

3

13：42
道が狭く、急な傾斜になっているためロープを握って歩く。滑りやすいので、足元に注意

2

13：21
下山しはじめてすぐはジグザグの道がしばらく続いた

1

13：19
禾生駅を目指して地形図を確認する。いよいよ下山開始だ

さいに自分の目でまち全体を見ると、本当に山間に民家が密集して都留のまちが成り立っているのを実感した。

山頂からの景色を一望したところで、地形図を広げて再び都留のまちを見下ろす。地形図と照らし合わせて、あの辺はどこの地域か、都留文科大学はどこにあるかなどを確かめた。ただ眺めているだけでは、自分が見ている地域の名前もわからなかったし、大学を見つけることもできなかった。地形図と比較しながらまちを見ることで、そういったところまでも見えるようになった。いつも私たちはこの景色の一部にいるのかと思うと、見下ろしているのが不思議な感じだ。

地形図と向き合えば

高川山には、山頂までのわかりやすい道があるので、地図全般を見なくても登りやすいだろう。それを今回は、地形図を最初から最後までじっくり見て、確認しながら進んだ。

地図

4

14：10
枯れ沢を渡る。転がっている石のなかには動いて危険なものもあるので、石を選びながら渡っていく

7

15：03
林道が砂利道からコンクリートの道へと変わる境目。山のなかの景色に別れを告げるような気がして、境目をこえる一歩が大事な一歩に思えた

5

14：20
林道が見えてきた（上）。その手前で木の上に巣を発見（右）。何の巣なのだろうか

到着！

16：09
禾生駅に到着。歩数は約12000歩。6時間半に及ぶ登山が完結した。達成感に満ちあふれる

8

15：24
高川橋を通過。ここを境にして、木々に囲まれた景色から、民家が建ち並ぶ景色へと変わった

6

14：53
地形図に載っている建物が見えてきた（上）。日ごろあまり見かけたことがなかったエゾタンポポが近くにたくさん咲いていた（左）

その結果、一つひとつの景色をていねいに見ることができた。

地形図は今見ている景色のその先には何があるのかも教えてくれる。だから次に何を目印にすればいいのかもわかるし、危険な道に備えることもできる。情報を読みとれる量が増えれば増えるほど、さらに広い景色が見える。出発する前は、読みとるのが難しそうな地形図を持ってどこまで進むことができるのか心配だった。でも、予想以上に地形図を見ながら進むことができ、禾生駅まで辿りつくことができた。地形図と真剣に向き合うことで、こんなにも多くの情報を読みとることができるとは思わなかった。

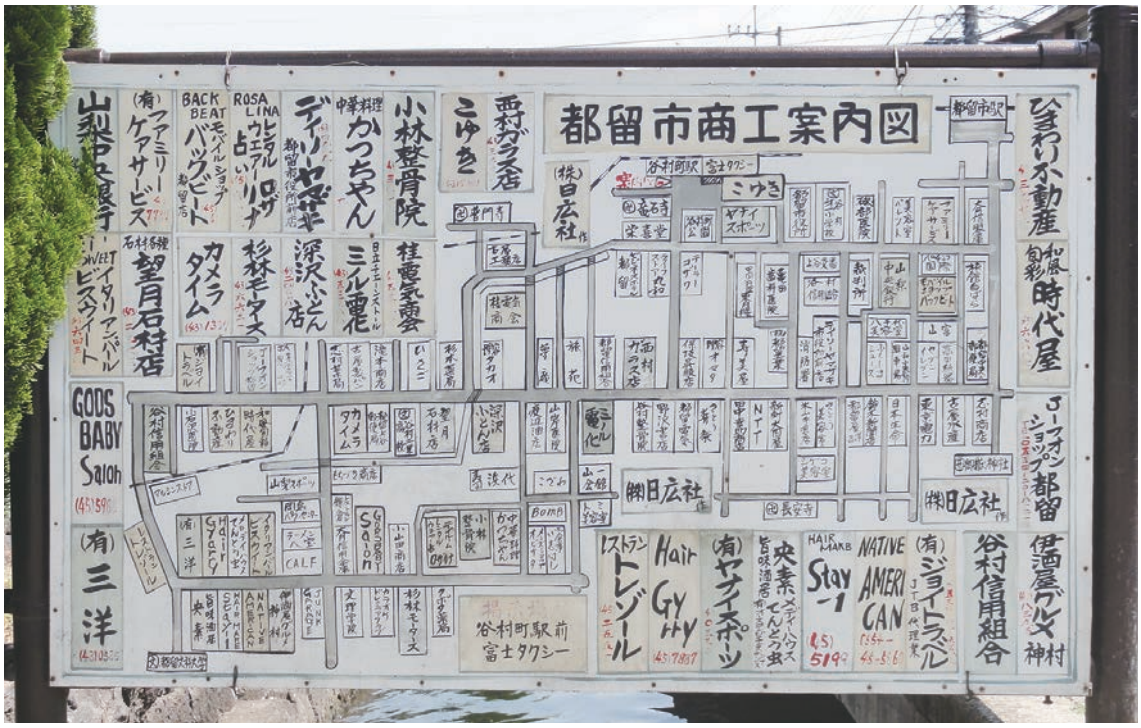
読みとった情報はまわりの景色と照らし合わせることでより正確なものになることもわかった。地形図を読みとれているという確信は、次の一歩を踏み出す自信にもつながり、迷うことなく目的地まで辿りつく道標になるのだ。

コラム　地図から広がる世界へ

歩いて、探して、見つけた地図

たんに地図といってもその種類はさまざまあります。ふだんは見落としてしまいそうなものでも、よく見ると地図の仲間なのかもしれません。私たちが見つけた「地図」をご紹介します。

『フィールド・ノート』編集部＝文・写真



【時の経過を読み取る】

いちど目に入ると、つい足を止めて眺めたくなる、そんな都留市商工案内図。筆文字からはあたたかみが感じられます。よくよく覗き込むと、この案内図には2004年に開業した都留文科大学前駅が書かれていません。このことから、地図が作製されてから少なくとも10年は経過していることがわかります。案内図は過去の町並みを示しつつ、今日もひっそりと風景に溶け込んでいます。

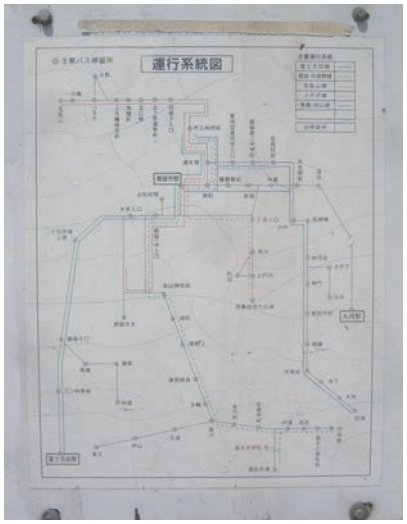
谷村第一小学校へ続く道沿いに、案内図は設置されている。
高さ 約90cm、幅 約150cm

地図

【小さな地名をひろう】

地図の定義は何だろう。いくつか辞書を引くと、地表を一定の約束で縮尺して平面に表現したもの、とあります。そう考えると、バスの運行図も（正確さは欠きますが）地図の仲間といえそうです。比較的新しい地形図や住宅地図が取りこぼしている地名・小字が、バス停の名前として図に示されています。

「道生堀（どうしょうぼり）」、「羽根子（はねこ）」：中央自動車道 都留 IC、院辺橋周辺にある地名（41 頁参照）。
「十日市場上宿（かみじゅく）」：十日市場のなかでも小篠神社付近を指す地名。かつて宿場を形成していたことを物語る名だという（「富士道を歩く会」での聞き取りから）。



都留第一中学校入口の「運行系統図」

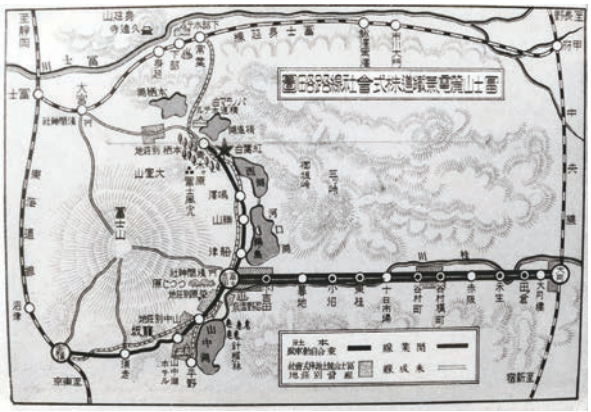
【石に刻まれた景色】

高川山の山頂にあった「山名盤」です。高川山の山頂から見える 42 箇所の山々の名称、かたち、方位などが刻まれています。東に高畑山、西に鶴ヶ鳥屋山、南には石割山などがあることが読み取れました。山名盤でどんな山が見えるのかがわかったので、山頂の景色をより楽しむことができました。

【未成線に託された夢】

昭和 4 年の路線計画。現在の富士急行線大月―富士山駅（旧富士吉田駅）間の開通記念にあわせて作られたもののようです。当初は身延線や東海道線に接続する計画があり、図のなかでは「未成線」として記されています。計画は実現こそしませんでしたが、当時の壮大な計画を今に伝えています。

〈参考文献〉
『富士山麓史』富士急行 50 年史編纂委員会
1977 年 8 月発行



「大月橋」や「谷村横町」などの古い駅名も見られる。『奥隆行写真コレクション』所収［山麓電車開通記念］より

早乙女塚

夏狩の長者の家には、20人の早乙女が植えても3日はかかるほどたくさんの田があった。ずば抜けて田植えの早い娘がいたので、長者は冗談まじりに「明日一番大きな田を一人で植えたなら、その田を付けて嫁の世話をしてやろう」と言った。

翌朝空が白み始めると、もう田で働く娘の姿があった。昼食もそこそこに働くその姿を見た長者は、たとえ植え切らなくても約束を果たそうと決めた。日が沈むと同時に田を植え終えた娘は、畦に座り手を合わせた。だがそのまま動かないので、人々が心配して近寄ると、息は無かった。みな娘をあわれみ、塚を作って供養した。

参考『郡内の民話』なまよみ出版

地図で民話を紐解けば

十日市場から夏狩にかけてはいくつかの民話が残っている。そのなかでひとつだけ、調べてみても舞台がはっきりしないお話があった。「早乙女塚」の物語だ。私は夏狩の地図を用意し、早乙女塚を探しに行こうと決めた。

深澤加奈（国文学科３年）＝文・写真

都留の民話にまつわる場所を見に行きたい。本誌で民話が取り上げられている記事をたびたび目にし、そう思ってはいたものの、都留の地理を把握しきれていない私は、行動に移すことをためらっていた。だが、地図を頼りに出掛けてみたらどうだろう。そうすれば、早乙女塚があるところまで私ひとりでも辿り着けるかもしれない。

4月16日の昼過ぎ、自転車に乗って大学を出発した。国道139号線を十日市場方面に進み、幅1mちょっとの、狭い道から住宅街に入っていく。中央自動車道の下を通り抜けると、家はなくなり景色が開けた。一面田畑だ。山がぐっと近くに迫る。自転車をとめて、地図で場所を確認する。道なりに進めば長慶寺があるので、寄っていくことにする。

長慶寺には10分もかからず到着した。広々とした境内の左手には竹林があり、たけのこも顔を出している。奥には水の流れがある。境内を出て地図を広げる。このまま夏狩地区をさらに進んで、塚を探そう。

長慶寺を離れようとしたとき、水飲み場があることに気づいた。看板には霊命水とある。せっかくだから飲んでいこうと思う。先に写真を撮っていると、大学生かと後ろから声を掛けられた。若い女性だ。女性はプラスチックのコップに水を汲んで飲んだ。

飲み終わるのを待って「ここらへんに早乙女塚っていう塚はありませんか」と訊いてみる。「えっ、さおとめづか？ 知らないなあ。ここに来て日が浅いから」。「そうなんですか」。「あっ、水飲む？ いっつもその祠の横にこのコップが置いてあるんだよね。飲んだらそこに戻せばいいよ」。コップを受け取り、水をいただく。冷たすぎず飲みやすい。霊命水って、寿命が延びるのだろうか、などと思いつつ、コップを洗って祠の脇に戻した。

立ち寄った長慶寺。水飲み場は、境内を出て道を挟んだところにある

手がかりはどこに

少し行くと、畑仕事中のおじいさんの姿。かなりのお歳のようだ。近づいていって「すみません」とできるだけ大きな声で話し掛ける。「んん？」「お尋ねしたいんですが、早乙女塚ってご存知ですか」。「あ？ なんだって？」「早乙女塚ってありませんか」。「さおとめづか……聞いたことねえなあ。ここんとこずーっと上ってくと、まだ（夏狩が）続いてっから、ほかんひとに聞いてみろし」。手がかりが掴めないまま、十二天神社を通り過ぎ、緩やかな坂道を上っていく。人影があれば自転車を止め、声を掛けに行くものの、早乙女塚を知るひとはいない。

誰かいないかときょろきょろしていると、車から荷物を降ろしているおじさんを発見。すみません、と声を掛け、早乙女塚を知らないかと尋ねる。「いやあ〜、聞いたことないなあ」と困り顔だ。だがそのあと、わざわざ向かいのお宅のかたにも相談しに行って「あそこのひとなら何か知ってるかもしれんね」と、あるお宅を教えてくれた。

紹介されたお宅の前まで来たが、呼び鈴がない。横開きの戸には鍵が掛かっていなかったので、ちょっとだけ開けて「ごめんください」と呼びかけてみる。と、ぱたぱたと足音がして、小さな女の子が出てきた。こちらをじっと見つめてくる。「誰かおうちのひとはいないかな。おじいちゃんとか、おばあちゃんとか……」と訊くと、女の子はなんにも言わず奥に戻ってしまった。だがすぐに、おばあさんと一緒に戻ってくる。呼んできてくれたようだ。事情を説明しだすと、何だなんだ、とおじいさんも顔を出した。

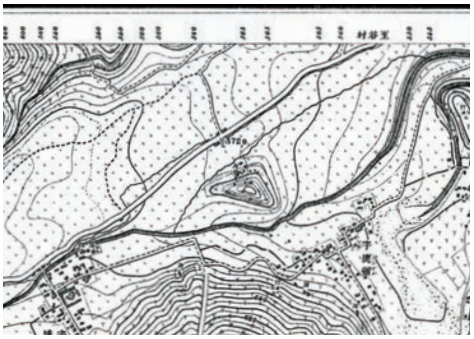
女の子が「どーぞ」と持ってきてくれた座布団に座り、玄関先でお話を伺うことになる。おじいさんは生まれも育ちも夏狩で、現在70代だそうだ。「あ〜ほんとだ、ここに夏狩ってあるなあ」。『郡内の民話』を受け取り、眼鏡をかけて早乙女塚の物語を読むおじいさん。「早乙女っちゅうのは知ってるよ。だけんど、ここらへんでは『そーとめ』っつって、男が田植えしてたんだ」。夏狩では田植えの時、女性はお茶出しをしていたとのことだった。

「『長者』ってあるけんど、俺が知ってる限りは、そんなおっきな田んぼ持ってるひとはいなかったなあ」と、こちらも引っかかるようだ。おじいさんとお話をするうちに、物語はいつぐらいのものなのか、そもそもほんとうに早乙女塚はあるのかという疑問がわいてきた。「まあ、書いたひとに聞いてみるが一番いいかもしれんな」。そうですね、と私は答え、筆者の内藤恭義（ないとうやすよし）さん（81）に会いに行くことにした。

地図を探す

後日、内藤さんのもとを訪ねる。経緯を説明すると快く質問に答えてくださった。お話によるとやはり、そのような事実があったかどうかは分からないという。時代としては江戸時代以降だそうだ。内藤さんが調査したところ『郷土誌（旧東桂村）（2）』に早乙女塚関連の記述があり、東桂駅のすぐそばにある東桂変電所が塚のあったとされる場所のようだ、とのことだった。

ただ変電所そのものを見に行っても仕方がない。東桂駅周辺の古い地図を手に入れて、今と昔のようすを見比べてみよう。そう考えた私は、明治時代の地図がある、都留市立図書館へ向かった。見せていただいた地図は明治21年測量のもので、隅には「貴重書」のシールが貼られていた。慎重にコピーを取らせてもらう。これ以上古いものとなると絵図になってしまうそうで、正確で詳細な情報が得られる地図のなかでは、最も古いものだそうだ。手に入れた地図を広げ、目的地の変電所周辺を見てみる。明治21年の時点では一面田んぼの記号だ。なるほど、これは早乙女塚のお話に即しているぞ。いまも物語の面影はあるのだろうか。とにかく、行ってみないと分からない。



明治 21 年測量、同 24 年製版・出版の「二万分一地形図」（一部抜粋）。右上から左下にかけて横断している道が現在の国道。富士急行線は当時まだ開通していなかった。図面右上が東桂駅周辺。あたりは一面田んぼの記号だ

紐解くとき

4月28日、東桂駅まで向かう。国道をひたすらまっすぐ進んでいく。途中から坂が険しくなってきたので、自転車を押して歩いた。12時半、駅に到着。内藤さんのお話通り、変電所はすぐそこらしい。駅からでも鉄塔の頭が見える。

5分も経たず変電所に着いた。民家にぐるりと囲まれている。むしろ、変電所のほうが民家のあいだにむりやり押し込まれたように見える。柵の向こうに目を凝らす。早乙女塚の跡らしきものは確認できなかった。近所のかたにお話を伺おうと周辺を歩きまわるが、あいにく、そとには誰もいない。

少し離れた場所から見た変電所のようす。家々が建ち並ぶなかに鉄塔が見える

なんだかがっかりした気持ちで駅に戻り、そとのベンチに腰掛けて明治時代の地図を広げる。地図と現在のようすとを見比べてみると、まちの変化の大きさに、改めて驚かされる。125年も経っていれば当然なのかもしれない。

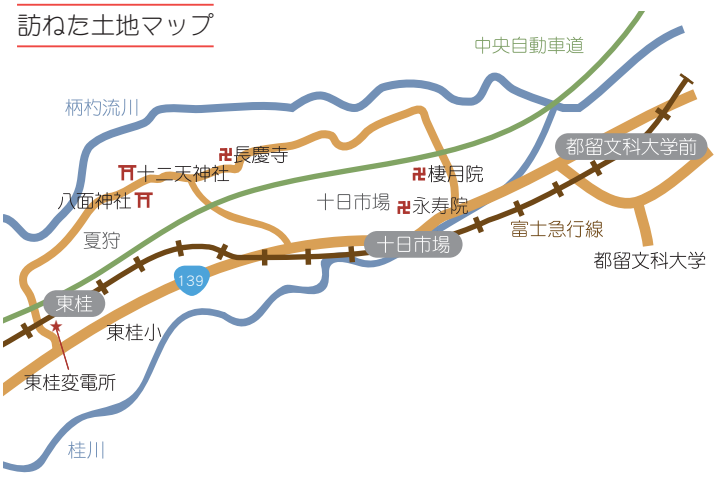
しかし、ふと思った。明治時代の地図が記録としてまちの風景を残してくれていたから、早乙女塚があったかもしれない景色を想像できた。ここには見渡す限り田が広がっていた、そんな時代が確かにあったのだ。それはこの地図を見なければ分からなかったことだ。

地図を持ち民話の地を訪ね、じっさいに自分の目で確かめてみる。すると、物語がまったくのでたらめではなく、根拠をもって生まれ、語り継がれてきたことを感じた。一見すると民話の地とは分からない場所へ行ったときも、昔の地図と見比べることで物語の面影を感じ取ることができた。

訪れた土地と土地は私のなかで繋がって、私だけの地図となる。歩き出すまえは道に迷わないか、帰って来られなくなるのではないかと不安だった。しかし、ひとりだと思っていた道のりには、ひととの出会いが待っていた。そして、地図は広げるたびに心強い相棒となっていった。

地図を持って歩くことで生まれる発見がある。そのことに気付いたいまは、地図と民話から見えてくる、私が知らない都留の姿にわくわくしている。

訪ねた土地マップ



見聞ノート

古渡に伝わる絵図

都留市鹿留（ししどめ）にある古渡（こわた）自治会館に一枚の絵図が保存されている。この絵図が作成された目的はなんだろう。そこからなにが読み取れるのか。
地域に伝存した資料が教えてくれる山と人との関係、絵図がいま抱えている課題について考えた。

絵図の存在を知ったのは昨年の春先。本学の卒業生で、そのころ古渡の梅農家を取材していた﨑田史浩さんが、古渡自治会館で古い地図を見てきたと話してくれた。写真を見せてもらうと、色彩豊かな画中に「十日市場」や「夏狩」など見覚えのある字面が顔をそろえている。しばし、目を凝らして写真に見入っていた。あれから一年、ようやく自分も見に行ける機会を得ることができた。内容自体とても興味深かったけれど、それ以上に間近で古いものを観察できるという期待のほうが、現地に向かう私の背中をより強く押したのだった。

3月26日、夕方5時に大学を出発。﨑田さんに先導してもらい、スクーターで古渡を目指す。頬と手をかすめる夕方の風はまだまだ冷たい。国道139号線から、案内標識に従って脇道へ降り、「早作（はやさく）の石仏群」を横目に見ながら、鹿留川に沿って上流のほうへ走っていく。途中、古渡橋という橋を渡って集落に入り、大屋根がひしめく民家のあいだを右左折して進んでいくと、目的地の古渡自治会館が見えてきた。

この日、絵図を見せてくださったのは志村繁さん（79）。本誌73号で取材している梅農家の一人で、自治会館の向かいにある商店を経営していらっしゃる。挨拶をすると穏やかな声色で「大変だねえ」とねぎらいの言葉が返ってきた。少しばかり緊張が解けたところで、いよいよ絵図との対面だ。

鮮やかな色づかい

館内に入ると、志村さんが鍵のついた押し入れの戸を開けた。いくつか資料が収納されているなか、お目当てのものは資料名が記された大きな段ボール箱に入れられている。A3サイズくらいに折りたたまれて大型辞書並みに分厚くなり、だいぶ窮屈そうにして収まっていた。紙質は、画用紙を何枚も重ねたように堅くて頑丈、とても紙を扱っているような気がしない。折り目に従って順に広げていくと、あっという間に部屋は埋まって、約3m四方の図面が姿を現した。

人家、橋、木々、巨石などが細やかに描かきこまれ、緑、赤、黄、紺などの鮮やかな色彩がそれぞれに役割をもって整然と塗り分けられている。しかもその塗り方は単色のべた塗りではなく、濃淡を活かして地形の起伏を表現する緻密さがあった。

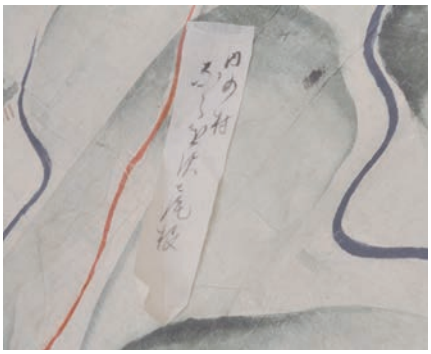
絵図が保存されている古渡自治会館。消防団の詰所が併設されている。大学を出てから6分ほどで到着した

作成された目的とは

眺めていて気づくことがある。人が住む集落よりも、山林が中心に描かれているのだ。さらに図面のあちこちに貼られた付箋（書道用和紙のような薄い紙）にも目がいく。折れたり撚れたり、あるいは付箋そのものは失われて痕跡だけが窺える箇所もあった。一つひとつには沢の名や土地の名と思しき文字が細い筆づかいで書かれている。道中案内や町絵図とはどこか性格が異なるようだ。絵図には以下のような長い題名がついていた。

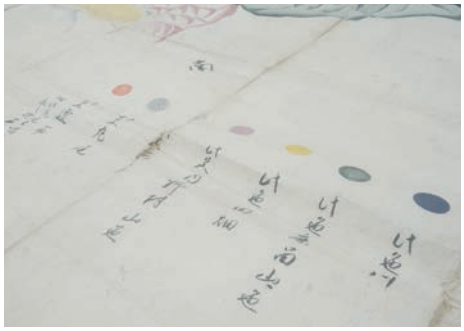
甲斐国都留郡 小沼村 倉見村与 同国同郡 鹿留村 境村 十日市場村 夏狩下組 鹿留山入会 並同国同郡 内野村山境論 裁許之事

「入会」とは、ある地域の住民が山林などを共同で利用し、利益を得ること。そして「山境論」（山論）とは、山林の境界や利害関係をめぐって起こる論争。つまりこの絵図は、複数の村が関わる山林の入会権を確認し、鹿留村と内野村（現在の忍野村内野）との山境について裁決する旨を記したものなのだ。



付箋のなかの一枚。「内の村／ならを沢 尾根」と記されている。ほかにも「わなばか沢」「大ザス」など数多くある

古渡に伝わる絵図



【右】志村さんと裏面の裁許文を見る。その場で判読できる文字が少なかったのが心残り（写真＝﨑田史浩）

【左】絵図の右下にある凡例。右から「此色川／此色鹿留山色／此色田畑／此色内野村山色／此色河原／此色丸尾／此色道筋」と読めた

絵図は裁決の内容を図にしたもので、裏面には「裁許之事」の内容が詳細に書き記されている。文末に「宝暦十三未年」とあるから、いまからちょうど２５０年前の話になる。ただし、この絵図が本当に２５０年前のものかは判然としない。宝暦13年（１７６３）に下された裁許文をのちに仕立て直したものかもしれないからだ。いずれにせよ、宝暦年間の人々の生活やそこから生じた問題、最後は知恵を出し合って一定の合意に漕ぎつけた成果を伝えるものであることは確かだ。

航空撮影などできない時代、広大な土地を、しかも複雑な山林中を的確に把握するのは決して容易ではなかっただろう。付箋に書かれた沢や尾根、目印となる地形に与えられた名前は、入会山の範囲や村境などの共通認識をもつうえで重要な働きをし、いま以上に生活のなかで機能していたのではないかと想像した。

その場で読み取れる文字はほんの一部に過ぎなかったけれど、絵図が作成された目的や背景がぼんやりと見え始めたような気がした。図面の見方は、すでに色鮮やかな絵画を観賞するものではなくなっていた。山は煮炊きや炭焼きに使う薪を始め、生活の糧を得るためには欠かせない存在だった。だから山の利用に関わる論争は、日々の生活に直結する切実な問題だったといえる。

『都留市史』によれば、こうした入会山をめぐる議論や境界に関する論争は各地で頻発していたらしく、現在でも当時の山論資料が数多く残されているという。この絵図の内容を活字にした刊行物は見つけられなかったが、入会7カ村のあいだには材木の伐採をめぐって山論が展開されていたことが分かった。争いが起こるたび、人々の求めに応じて役所から裁決が下される。そのさい、過去の資料を証拠として提出させることもあったから、この絵図も不測の事態に備えて大切にされていたのだろう。

黄色で塗られた鹿留村。紺色で描かれた河川は左が鹿留川、右が桂川だと思われる

志村さんによると、この絵図はほかの資料とともに代々古渡地区に引き継がれてきたものだという。以前は絵図について知っている人がおられたが他界されてしまい、いまでは詳しく知る人はいないのではないか、ということだった。

そういえば、志村さんも押し入れを開けるとき、「どういうものかよく分からないけど……」とおっしゃっていた。それだけ長い時間が経過し、生活のしかたも大きく変わったということなのか。山と人との関係が薄れるにつれ、絵図は存在意義を失って、いよいよ詳しい由来が忘れられかけている。

絵図が抱える課題

志村さんは過去に、古いものはよく分からないから処分してはどうか、という声を耳にしたことがあるという。もし仮に処分されてしまえば、地域史を考えるうえで大きな損失になりかねない。いろいろな意見があるなか、絵図を始めとする資料が代々自治会に引き継がれてきた現状に安堵するばかりだ。

ただ、処分してはどうかという意見も理解できなくない。そこには、由来や価値が不明なものを持ち続けることへの煩わしさや懸念が読み取れる。現在の生活のなかで役割を果たさなくなった以上、文化財という色眼鏡をはずせば、その「モノ」を持ち続けることに疑問が出るのはむしろ当然かもしれない。またいっぽうで、この絵図に資料的な価値があるのも間違いないだろう。

地域に伝わる資料や文化財が抱える課題が、志村さんの耳にした声のなかに潜んでいるような気がした。

サンパーク都留グラススキー場周辺から見た鹿留山方面
（写真＝北垣憲仁　2013.05.10 撮影）

＊　＊　＊

古渡の絵図が明らかにするのは、たんに村々のあいだで諍(いさか)いが起きていた、という事実だけではない。山と人との密接な関わりや、ときには論争に発展するほど厳格だった入会山に対する姿勢。そしてなにより、対立するものどうしが折り合いをつけたことを絵図は示しているのだ。たとえ、折り合いの内容が役人の決めた裁許であったとしても、役人を含むすべての人の苦労が図面に圧縮されているかのように感じられる。

そんな絵図と古渡とをつなぐ縁の糸は、日ごと細くなりつつある。しかし、「モノ」の由来が少しでも明らかになれば、関係はしだいに修復されていくのではないか。すでに分かっている事実や研究成果をもっと丹念に解きほぐすことで、きっと資料は一つの記録として存在意義を回復できる。

私は古渡の絵図から土地の来歴を学ぶとともに、地域に伝存する資料が課題を乗り越えていく、その道筋を思い描くことができた。

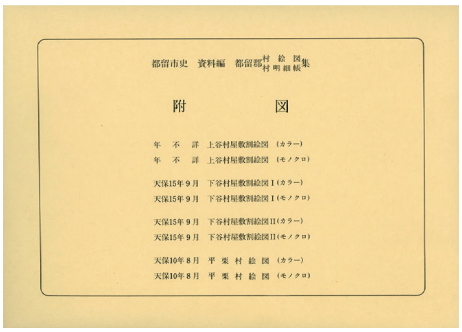
牛丸景太（国文学科４年）＝文・写真

地図から広がる世界へ

本と資料の紹介

地図と向き合うために
私たちが参考にした書籍や資料を紹介します。

地域史を
解きほぐす
手引きに



『都留市史 資料編 村絵図／村名明細帳集 附図』
都留市史編纂委員会 編集
1998年3月 発行

土地に
根付く物語に
触れる

『郡内の民話』
内藤恭義 文・鈴木茂治 絵
2004年9月 改訂発行

地図と
写真を
見くらべる

『奥隆行写真コレクション』
都留文科大学地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門 編集　2012年3月 第二版発行

奥隆行氏が生前に撮影・収集した写真を、本学フィールド・ミュージアムがデジタル化し、多くの人に使用してもらえるよう整理した目録です。山川や街並み、人の生活など、およそ四千枚にのぼる写真を収録。写真編と資料編にまとめられています。

「二万分一地形図」（複写 A3サイズ）

明治21年（1888）、国の陸地測量部によって測量された都留周辺の2万分の1地形図です。都留市立図書館蔵の原本を複写させていただきました。同時代の地図と写真とを照らし合わせれば、昔の地域のようすがより鮮明に浮かびあがってきます。

地図
を折りたたんで

私たちが向き合った地図は
作られた時代・目的によって種類や性格は異なるけれど、
どれも一定の約束にしたがって、端的に土地のようすを表していた。

向き合いかたによっては
視野が及ばない遠くの景色を想像させ、
ときには自然の生きものや昔の人びとの暮らし、
変化していく土地のようすを明らかにする。
比較となる過去へ私たちを導きながら、
地域の今をいっそう際立たせて見せてくれた。

地図を主役に据え、そこから何かを汲み取ろうとする作業。
それは、洗練された言葉の向こうに
深く意味を読み取ろうとすることと通じ合うものがある。

地図を広げ、考える。
顔を上げ、周囲を見渡し、ふたたび地図に目を落とす。
きっと地図は、私たちがまだ見出していない地域の姿をその一枚に秘めている。

春を告げるビロードツリアブ

イチゴの花の蜜を吸うビロードツリアブ

ビロードとは布の片面に毛を立てた、柔らかくてなめらかな織物のこと。だから、毛の生えた生きものの名前には「ビロード」がつくことがある。ビロードツリアブもその名の通り毛が生えていて、春だけに発生するアブとして知られている。写真で見たぬいぐるみのような姿に惹かれた私は、さっそく春のフィールドに出かけてみた。

鈴木陽花（初等教育学科４年）＝文・写真・イラスト

春のフィールドで

太陽の日差しがあたたかい。時間のながれもおだやかに感じる。まさに春の陽気だ。冬の間はさびしかった地面にもすっかり緑が戻り、おなじみの草花たちが顔をそろえている4月上旬の野原。

空中を縫うように、ハチが忙しそうに飛びまわっている。そのいっぽうで、少し変わった飛びかたをしている虫がいた。糸で吊り下げられているかのように、ほとんど同じ高さを保ったまま少しずつ移動していく。体中にはふわふわの毛が生えていて、日が当たると艶があるようにも見える。毛の質感は、まるでビロードのようだ。これはビロードツリアブに違いないだろう。思わず笑ってしまうほど、名前の通りの姿をしている。毛が生えていてふわふわ。それに加えて、後ろ脚をピーンと伸ばして飛ぶ姿がなんとも可愛らしい。

ひだまりの似合う虫

今まで知らなかったことが不思議なくらい、平地の野原や山道など、至るところで見かけるようになった。お昼にかけて気温が上がるころ、どこからか飛んできて花の蜜を吸う。そして日が低くなり、気温が下がってくるころにはすっかり姿が見られなくなる。

午前中は日陰になる場所に生えているムスカリの花にも、午後になると3匹ほどのビロードツリアブが集まってきていた。どうやら、あたたかくて日の当たる場所が活動には適しているみたいだ。ひだまりのなかを花から花へと飛びまわる姿は微笑ましく、春の景色がいっそう楽しく感じられる。

静と動

できるだけ近くで観察しようと、オオイヌノフグリの花の近くにしゃがんで待つ。すると、私のすぐ横の花にやってきた。脚は花につかまっているようだが、翅の動きは止まっていない。近くで見ると翅が細かくブルブル震えているのが分かるし、プーンという翅の音も聞こえてくる。こんなふうに飛びながら静止することを「ホバリング」という。止まったほうがエネルギーを消費しなくてすむ気もするけれど、このほうが花から花への移動が滑らかで効率がいいのだろうか。

花に抜き差ししている口吻は、体長の半

分ほどはあるだろう。この長い口吻をストローのように使い、花の奥にある蜜を吸っているようだ。じっと見ていると、口吻の先が二股に分かれるのが見えた。このほうが蜜を吸いやすいし、先だけ分かれていることで邪魔になりにくいのかもしれない。

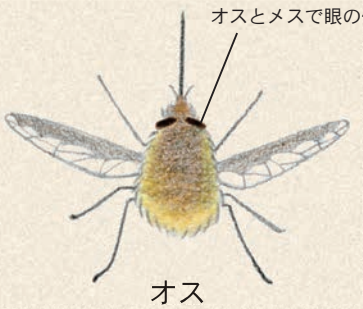
ずっと目で追いかけていると、石の上に止まった。そっと近づいて、上から観察する。本当に止まっているときは、翅が下を向いてぴたりと動かない。しばらく見ていると、よくハエがするように前脚や後ろ脚をこすり合わせていた。こうして再びほかの花へと飛んでいく。気まぐれに行動しているように見えても、その中心は蜜を吸うことにあるのだと思えてくる。

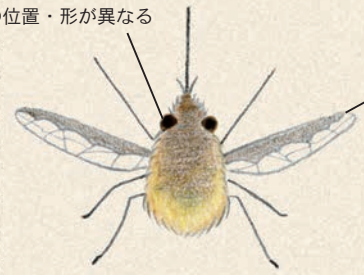
＊　＊　＊

季節の移り変わりは、命の移り変わりでもある。健気に飛びまわっていたビロードツリアブたちも、5月中旬には見られなくなった。それでもその姿は、春の新しい風景の一片として私のなかに刻み込まれている。目立つこともない小さな命に目を向けることの楽しみを、春の天使たちが教えてくれた。

ビロードツリアブってこんな虫

短い春のあいだに出会った雌雄は、命をつないで一生を終える。土に産みつけられた卵からかえった幼虫は、土中に巣を作るヒメハナバチ類の幼虫やさなぎに寄生し、次の春を待つと言われている。





翅の上の部分は黒く、下の透明な部分との境界が波打っている

蜜を吸うときなどに口吻の先が二股に分かれているのが確認できる

花から花へ―ビロードツリアブがやってきた花―

ムスカリ

オオイヌノフグリとヒメオドリコソウ

開きかけのリンドウの花にもぐり込んで蜜を吸うこともある

今までに登場した生きものたち

カジカガエル

アカネズミ

テントウムシ

第20回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

H・D・ソローが『ウォールデン　森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。今号では、「ヒロバ」での遊び（26・27頁）、カヤネズミの楽園をつくる（28・29頁）を掲載します。

岩間美千子氏による聞き取りと資料収集に基づいて成瀬洋平氏が描いた「谷映」。外壁と看板の色はイメージによるもので事実とは異なる。右下の手書きの見取り図は、岩間美千子氏が聞き取りと資料収集をもとに描いたもの

谷村座と若松館（昭和33年頃）

『郡内研究第６号』（1996 年）―「谷村座と若松館」―
中央が谷村座、右奥に写るのが谷村映画劇場。『郡内研究第６号』には谷村座と若松館、撮影は昭和 33 年頃とあるが、今回の聞き取り調査から若松館は谷村映画劇場に、撮影年は昭和 25 年～ 30 年にすべきと考える

谷（たに）の町・史（ふみ）の里
谷村にあった映画館のこと ③

「ヒロバ」での遊び

―　その後の「谷映（ヤエイ）」(2)　―

―谷村にあった映画館のこと―　として二人のかたに記憶を綴っていただいた「谷映」。岩間美千子さんによる聞き取りと資料収集に基づく紙上での再建です。

私たちに最高の遊びを提供してくれた「ヒロバの傾斜」が無くなったのは昭和36年頃。ヒロバには車庫が建ち、子どもたちの足が少しずつ遠のいて遊び場としての役割を終えていった。

映画館としての営業はわずか数年。建設後5年ほどで姿を消した「谷映」は、その跡地で遊び育った私にとってミステリアスな存在である。その建物は、トタン屋根の木造一階建て、とはいえ当時の二階家よりも高さがあり、外壁はモルタル（＊1）。屋根にはスピーカーが設置されていた。

八朔祭りの集合写真（羽田綾女氏所蔵）
背後に谷映の屋根と上映作品の看板が写る。上映作品は、『銭形平次』。出演者は、長谷川一夫、日高澄子、三條美紀、佐々木小二郎とあり、昭和 26 年 4 月 28 日封切りの作品であることが判る（＊３）

おもに大映の作品を上映していて、収容人員１００名ほど。入り口を入ると正面に白い壁があり映画のポスターが貼られていた。壁の左右にある黒っぽいカーテンの向こうに5人掛けの椅子が並ぶ観客席。映写室は客席後方にあり、専用階段が設置されていた。入り口の左側にはモギリ用の移動式カウンターがあり、右側に赤いレザーのソファーが置かれていた。売店では菓子パンや袋菓子、アイスキャンディーが売られていたという（＊2）。

私と益子氏の手元にある写真の背景として写る「谷映」。『郡内研究第6号』の「谷村座と若松館」に掲載されている写真。羽田綾女氏蔵の昭和26年頃の八朔祭りの写真。これらの写真と当時を知る人の「谷映の記憶」を交えて「谷村映画劇場の姿」を探ってみた。

（注）
＊１・本誌75号39頁参照。
＊２・谷映経営者の長女からの聞き取りによる。
＊３・http://agua.jpn.org/film/c319.html

岩間美千子（都留市中央在住）＝文・絵
成瀬洋平（本学比較文化学科卒業生）＝絵

なお、「谷映」にまつわる情報をご存じのかたは、本誌『フィールド・ノート』編集部までお知らせください。

カヤネズミの楽園は、納屋を改築して造った観察小屋の目の前にある

第20回
フィールド・ミュージアムのたのしみ

カヤネズミの楽園をつくる

ススキなどイネ科植物の葉を細かく裂いて球状の巣をつくるカヤネズミ。身近にいるにもかかわらずその生態はほとんどわかっていません。暮らしの謎をこの目で解き明かしてみたい。そのような想いから中屋敷フィールドの草原でカヤネズミの楽園づくりを始めました。

大学から北西の方角に歩いて20分ほどの距離に中屋敷フィールドはあります。南向きの緩やかな斜面の縁を柄杓流川が流れ、対岸は溶岩流による急峻な崖となっています。

このフィールドの入り口にある清水貞一（しみずていいち）さんの水田では、5月19日に田植えをしました。今年90歳になる清水さんは、手で植えると一本一本が自分の子どものように愛おしいと、今年も一人で手植えによる田植えをしました。清水さんの水田を通り過ぎ急な坂道を下っていくと斜面にマタタビの白い葉が見えてきます。毎年、この白い葉を見て私は梅雨が近いことを知ります。

私がこのフィールドに通い始めたのは、2000年の秋。休耕田にススキの群落があり、秋風に揺れる穂を見て、一目でここが気に入りました。ここが気に入った理由はほかにもあります。カヤネズミの存在です。

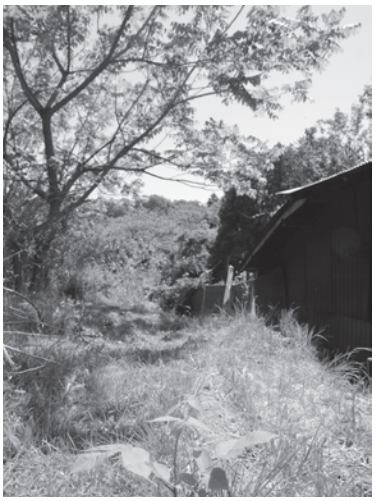
カヤネズミという名前を初めて私が知ったのは、小学生のころのこと。父と川辺を歩きながら、ススキのなかにソフトボールほどの大きさの巣を見つけました。その巣はススキの葉を細かく裂いて編み込むようにつくられていたのですが、その時、これは鳥の巣だと思っていました。しかし父は、これがカヤネズミの巣だと教えてくれたのです。どのようにしてボールのような美しい形の巣を空中につくるのだろう。ハンモックのように風に揺れる巣を見ながら、いつかカヤネズミに出会いたいと思うようになったのです。

世界一小さなネズミ

カヤネズミは体長6㎝ほど。世界でもっとも小さなネズミの仲間といえるでしょう。重さは10gくらいです。尾は体長と同じほどあり、葉などに巻き付けて体のバランスをとりながら移動できます。ふつう、低地の草地や水田、畑、休耕地などのイネ科植物、とくにススキやオギ、チガヤなどが密生し水気のある場所を好むようです。私たちの身近に暮らしている哺乳類の一つといっていいかもしれません。しかし、野外で何を食べているのかさえ未だにわかっていません。

もともと一面に水田が広がっていた中屋敷フィールドも、いつしか休耕田が増え、今ではここを耕す人はいなくなりました。ススキの群落は、草刈りなどの手入れをしないで放っておくとやがて藪になるといいます。確かに中屋敷フィールドでもササやクルミの木が目立つようになり、ススキの草原の面積も減りつつあります。子どものころから憧れていた動物です。どうにかカヤネズミが暮らせる環境を少しでも残せないものでしょうか。

さっそく、草原の地主である渡邊宗男（わたなべむねお）さんに、草刈りすることを条件に土地をお借りし、カヤネズミの楽園をつくることにしました。楽園といっても、あまりに広い面積だと手


クルミの林になりつつあるかつてのススキ草原。手前は今年芽生えたクルミ

ノイバラの花。中屋敷では５月下旬から花が咲く

カラタチの葉を食べて育つアゲハチョウの幼虫

入れが大変です。そこで10ｍ四方の小さな草地に生えているススキやオギを冬場に草刈りをし、維持していくことにしました。

楽園計画

じつは、この楽園には私なりのモデルがありました。以前、神奈川県秦野市で動物調査をしていたとき、ススキとオギが生えた休耕田にカヤネズミの巣を４個見つけました。面積はおよそ１００㎡ほどでした。

７月の夕暮れ、この田の畦に座り観察していると、まだ日が明るいうちに巣を出て、ゆっくりと葉から葉へと移動していくカヤネズミに出会いました。ときどき休みながら注意深く葉の上を歩く姿は、まるで大木の枝を伝って移動していくムササビのようだと思いました。観察できた時間は１分ほど。しかしカヤネズミを野外で見ることが子どものころからの夢だっただけに、一瞬の出会いだけで十分でした。

この休耕田の環境をモデルにカヤネズミの楽園をつくってはみたものの、いつまでたっても巣はできません。私の楽園計画では巣をつくる気分になれなかったのでしょう。

なぜ巣をつくる気分にならないのか、考えてみてもその原因はよくわかりません。ただ、巣をつくると言われている初夏と秋にはイノシシやニホンジカが頻繁に草原にやってきていました。体の小さなカヤネズミにとって、捕食される恐れはなくとも近くを通る音や振動だけで脅威だったのかもしれません。

清水さんに学ぶ自然との交流

つぎに私は、こうした大型獣が近寄れないよう棘のある植物で生け垣をつくり、草地を囲ってみようと考えました。

生け垣は、なるべくこのあたりにふつうにあるものでつくりたい。そこで私は、ノイバラとカラタチを組み合わせて植えてみることにしました。ノイバラは直径２㎝ほどの白い花にイチモンジチョウが吸蜜にやってきますし、カラタチはアゲハチョウの幼虫が食草としています。カヤネズミだけでなく多くの生きものとの関わりも楽園をつくるなかで生まれてくるでしょう。

生け垣をつくる準備は整いました。カラタチやノイバラが生け垣を形づくるようになるまでにあと３年ほどかかるかもしれません。しかし、急いでカヤネズミの暮らしの謎を解こうとは考えていません。私の関心は、優れた機械で自然を理解することにあるのではなく、今なお一人で手植えによる田植えをする清水さんのように、自分の体や感覚、心を通して直にカヤネズミと交流し理解することにあるからです。

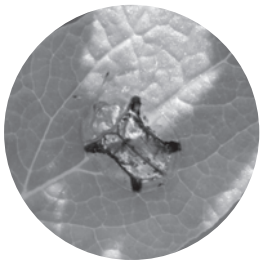
北垣憲仁（本誌発行人）＝文・写真

フィールド暦

このページでは、都留市の生きものの情報を記録し、発信しています。こんな生きものがいた・見つけたという発見を大切にし、多くのかたと共有したいと思っています。
読者のみなさまからの情報もお待ちしていますので、ぜひ編集部までお寄せください。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

フジの花
2013年4月29日　都留市川茂
ヤマザクラの花が終わった山の斜面や林縁を、藤色が彩ります。



ジンガサハムシ
2013年5月13日　都留市田原
透明の部分より、黄金色が目を引きます。

クロモジの花
2013年4月23日　都留市田原
クロモジを見つけたら、葉をちぎって香りを楽しみましょう。

チゴユリの花
2013年4月25日　都留市上谷
半日陰の林床で、下向きの花を咲かせます。

フデリンドウの花
2013年4月18日　都留市上谷
寒さの残る時期、日当たりのいい場所でひっそり花を咲かせます。

カラスアゲハ
2013年4月9日　都留市田原
黒っぽい大型のチョウで、後ろ翅の赤が目立ちます。

キジ（オス）の死体
2013年4月14日　都留市田原
この状況から、大学の建物に衝突死したと思われました。

ニホントカゲ
2013年5月13日　都留市田原
冬眠から目覚めたのでしょうか。日光浴をしていました。

オドリコソウの花
2013年4月29日　都留市川棚
茎と葉の付け根の部分から花が咲くのが特徴です。

センサーカメラが写した動物たち

都留文科大学フィールド・ミュージアムでは、市内にセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。ここでは、2012 年 12 月～ 2013 年 4 月に都留市上谷と鹿留で撮影された動物を紹介します。

ハクビシン　2012 年 12 月 19 日　都留市鹿留
細い水路の脇でハクビシンが撮影されました。冬に本種が確認されるケースは多くはありません。

リス　2012 年 12 月 25 日　都留市鹿留
リスはほぼ 1 年中、都留市内で見られます。市内では外来種のクリハラリスはまだ記録されていません。

アナグマ　2013 年 3 月 19 日　都留市上谷
右側にもアナグマの顔が見えており、2 頭で写っています。年に数回、複数の個体が同時に確認されます。

タヌキ　2013 年 3 月 19 日　都留市上谷
この場所ではタヌキは常連です。1 年中、センサーカメラに写ります。

コマドリ　2013 年 4 月 17 日　都留市鹿留
コマドリは渡りの時期に市内を通過して行きます。秋よりも春に見られることがほとんどです。

アカネズミ　2013 年 4 月 20 日　都留市鹿留
沢の岩からアカネズミがジャンプ。この後、写真右端の岸まで届いたのでしょうか。

つるりんの全景（2013.4.7）

つるりん春

つるりん。
この愛らしい名前の正体はキャンパスにある小さな林のことだ。グラウンドと１号館に挟まれている林を「つるりん」の愛称で呼んでいる。この林は今から 40 数年前に大学の教員や職員によって植林されてつくられたそうだ。１年間、このつるりんとそこに暮らす生きものたちを見続ける。

砂田真宏（初等教育学科４年）＝文・写真・図

林床に咲く植物
（左から）セントウソウ、タチツボスミレ、クサノオウ、ニョイスミレ。ほかにオオイヌノフグリ、ヒメオドリコソウなどが見られる。図鑑をめくっては少しずつ名前を覚えた

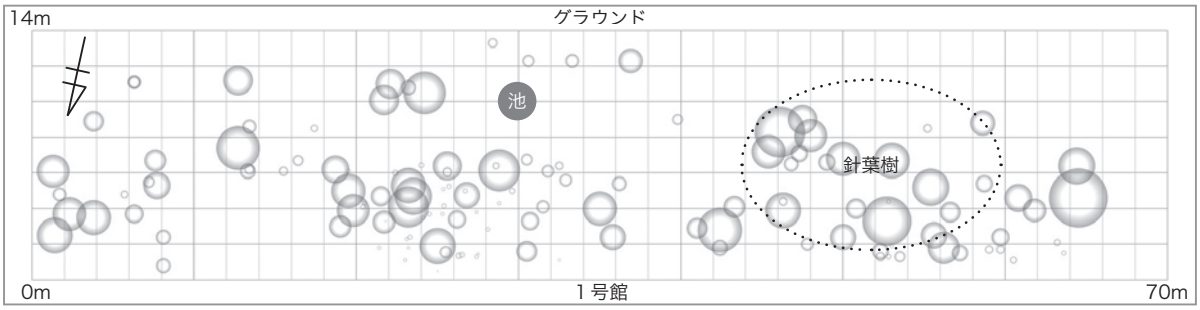
足元に目をやるとセントウソウの白く小さな花が林床の大部分を覆っている。その間を埋めるようにしてタチツボスミレやクサノオウ、ヒメオドリコソウの花が顔を出す。アブの仲間はその蜜を吸うために忙しそうに飛び回っている。今年は少し足早に春がやってきた。でもじっくり見てみると春のつるりんのようすはなんだかいつもと違っていた。

つるりんは南北に14ｍ、東西に70ｍほどの細長い林で、ちょうど１号館の西側半分と隣り合っている。林の西側には針葉樹がいくつかあり、東側は落葉広葉樹が分布する。そして林の真ん中に池がある。この池も人工的につくられたもので、直径が２ｍほどの丸い形をしている。この林に生えている樹木や草花の多くはキャンパスの周辺で見られるものばかりだ。そんな林内は賑やかなキャンパスとは対照的に人通りは少ない。ここへは１年生の時からときどき足を運んでいる。生きものを見つけると写真を撮ったり、図鑑で調べたりを繰り返す。生きものの名前や花の咲く時期が少しずつ分かるようになってきた。

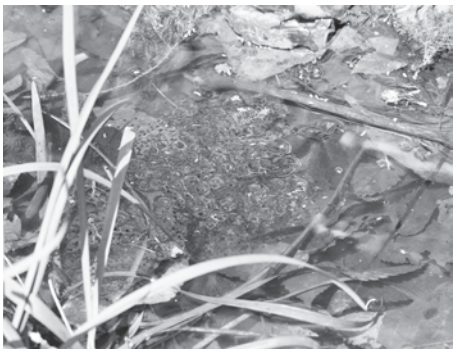
ヤマアカガエルの産卵

林の真ん中の小さな池。池と言っても少し大きな水たまりのようなもので、水深は25～30㎝ほどしかない。以前からこの池には２月ころになるとヤマアカガエルが産卵に訪れている。少なくともここ３年は毎年やってきていた。ヤマアカガエルはつるりんの生きもののなかでも早くに冬から目を覚ます（産卵をしたらまた冬眠をするそうだ）。

はじめてそれがヤマアカガエルであると知った年はオタマジャクシを、その次の年はもうすぐオタマジャクシが出てきそうな状態の卵塊を見ることができた。断片的につるりんのヤマアカガエルの成長は見てきたけれど、産卵から順を追って成長のようすを見たことがない。今年



つるりんの略地図（2012年生物学実験 毎木調査の結果より作成）
図中の円で示したのが樹木。円の大きさは樹木の直径に比例させた。1マスは2m×2m。西側には針葉樹が、東側には落葉広葉樹が分布する。真ん中あたりに池がある。樹木は少なくとも51種類133個体。数字で見ると林の構成が客観的に見えてくる



右写真　ヤマアカガエルの卵塊。大きさはどんぶり一杯ほど。小さな池のなかに3つの卵塊を見つけた（2013.4.5）
左写真　水面に顔を出すヤマアカガエル。少しでも音を立てると水中の落ち葉の下に隠れてしばらく出てこない（2013.4.7）

こそは産みつけられたばかりの卵塊とその成長を見ておきたくて、例年卵塊が見つかる2月から池へと通うことにした。

意図しない出会い

2月の林はまだ静まり返っている。3月まで数日おきに通い続けたが、卵塊が見つからない。もうまわりの草花はすっかり春の装いへと変わってしまった。原因は分かっている。今年はまとまった雨が無く、池に水がほとんどなかったのだ。これでは産卵できない。池に水が溜まらないままとうとう4月になってしまった。

今年は来なかったか、そう思い始めたころだった。4月3日、2日間のまとまった雨が止み、心地の良い日差しの降るなか、彼らはいつもより2ヶ月遅れてやってきた。ヤマアカガエルを探すつもりはなくつるりんに足を運んだときだったから、うれしい反面いつもと違うようすに戸惑う。今まで順調そうに生きているヤマアカガエルのようすしか見てこなかったし、それが当たり前にあるのだと思っていたことに気づいた。3年間のしかも断片的な情報から考える生きものの暮らしのようすはまだその一部に過ぎない。毎年同じようで、林もそこに暮らす生きものも少しずつ変化していく。3年の時間と今年の春ていねいに見ようとしたことでその小さな変化に気づくことができた。

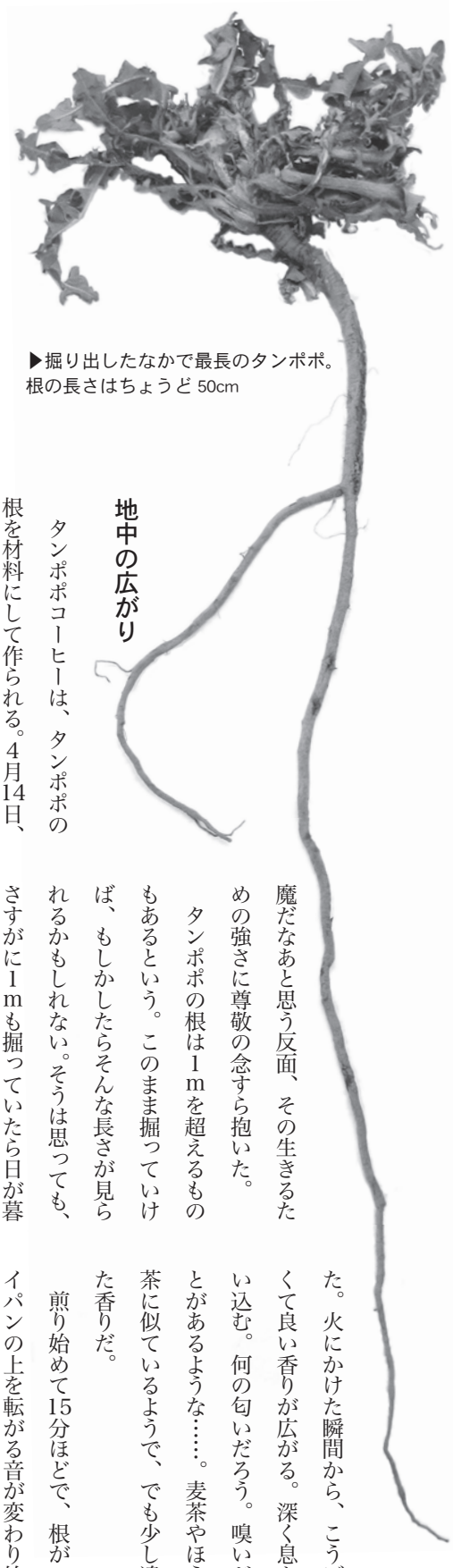
これまでも大学の裏山や中屋敷フィールドなどで、たくさんの生きものとの出会いがあった。では、私たちの身近な場所、キャンパス内にはどんな生きものたちが暮らしているのだろうか。今まで断片的にしか見てこなかったつるりんの生きものたちのようすを1年間見続けてみたい。気づけばつるりんの林冠にはハリエンジュの白い花が存在感をましている。いよいよ夏も本番だ。

春の一杯

―タンポポコーヒーを味わう―

春をもっと満喫したい。
春といえばタンポポの花。
タンポポで思いついたのはタンポポコーヒーだ。
存在は知っているけれど挑戦したことはない。
飲んだことのない春の味、満喫してみよう。

別符沙都樹（国文学科２年）＝文・写真



▶掘り出したなかで最長のタンポポ。根の長さはちょうど 50cm

地中の広がり

タンポポコーヒーは、タンポポの根を材料にして作られる。4月14日、タンポポの根を収穫するために中屋敷フィールドへ足を運んだ。タンポポが群生している小屋の周りに目星をつける。タンポポ以外の雑草も、シャベルの邪魔をするかのようにたくさん生えている。地表のみならず、地中でも互いに絡み合うようにしてそれぞれが根を伸ばす。途中でどれがどの根なのか分からなくなることもたびたびだ。隣で同じようにシャベルをふるう鈴木さんの、そのまた向こうにある植物の根が横切って遮るなんてことも。地中では予想もし得ない広がりがあるのだ。作業の邪魔だなあと思う反面、その生きるための強さに尊敬の念すら抱いた。

タンポポの根は1mを超えるものもあるという。このまま掘っていけば、もしかしたらそんな長さが見られるかもしれない。そうは思っても、さすがに1mも掘っていたら日が暮れてしまう。根が細くなったところでちぎり、次の株に取り掛かった。

1時間ほどで計13本の根を収穫した。全身砂まみれだ。その場で根についた土をあらかた洗い流す。帰ってから再度ていねいに洗いなおし、風通しの良いところで乾燥させた。

課題は灰汁（あく）

4月17日、乾燥させた根はパリパリになっている。拍子抜けするほど簡単に折れた。地中から出たばかりの時のしなやかさはない。

根を1cmほどに細かくして焙煎した。火にかけた瞬間から、こうばしくて良い香りが広がる。深く息を吸い込む。何の匂いだろう。嗅いだことがあるような……。麦茶やほうじ茶に似ているようで、でも少し違った香りだ。

煎り始めて15分ほどで、根がフライパンの上を転がる音が変わり始めた。少しこもったコロコロという音から、水分が飛んで軽やかなカラカラという音になる。強火にして一気に水気を飛ばしたくても、焦げてしまうからぐっと我慢する。色は黄土色から焦げ茶へとじんわり変わっていった。そのあとミキサーで粉末にして下準備が整う。焦げ茶だった根はきな粉のような色になった。これで本当にコーヒーのようになるのだろうか。

フィルターを通してマグカップへ注ぐ。お湯をかけたとたん、根の粉末は濃い茶色にさっと変わった。

右：根を切らないように株の周囲から慎重に掘る

左上：根を洗うと、一部の表面が剥がれ、白い姿を現した。驚くほど真っ白で綺麗だ

左下：念を入れて 30 分ほど煎る。出来上がった量は片手に軽く乗ってしまうほど

漂っていたこうばしい香りが強まる。マグカップに注がれる液体は、粉末の色からは信じられないほど黒い。まさにコーヒーの色だ。完成した喜びと未知の味への不安が半々あった。恐るおそる一口。思わずうっとうめく。苦い！　香りに反した、苦くて渋くてえぐい味。飲み込んだあとにも喉元にしばらく留まる。灰汁のようだ。飲みきることはとてもできなかった。これでは完成ではないだろう。もう一度作りなおすことにした。

春を一口

4月27日、再び中屋敷フィールドへ行く。4月の頭にほとんどタンポポの咲いていなかった場所も、今ではタンポポの黄色が地面を彩る。選び放題だ。1時間半かけて8本の根を収穫した。

前とほとんど同じ工程を辿る。しかし今回は灰汁抜きのために取ってきたらすぐ包丁で刻み、一晩水にさらした。そのとき、どんな味がするのか好奇心で根をそっとかじってみた。舌だけでなく、かじった前歯にまで染み入るような強烈な灰汁。これではあの味になったのも当然だ。

翌朝もう一度かじってみる。あの強烈な灰汁は驚くほどに消えていた。これなら美味しいタンポポコーヒーが作れるかもしれない。前よりも念入りに焙煎する。灰汁とともに、香りも少し弱まってしまったようだ。前回火にかけた瞬間広がった香りは、フライパンをふるたびにふわりと優しく漂ってきた。

粉末にし、完成したタンポポコーヒーは前と同じくらい黒い。そっと一口。灰汁はほとんどなかった。かわりにすっきりとした飲み心地。何だか昔に飲んだことがあるような味だ。ほのかな懐かしさと香ばしさがある。やっと完成したんだ。声をあげて大喜びするのではなく、安堵するような静かな喜びと達成感がじんわりと広がる。これはタンポポコーヒーが気持ちを落ち着かせてくれているからなのだろうか。静かな喜びを噛みしめるように、忘れないようにと一口、もう一口とタンポポコーヒーを味わった。

春を満喫したいということから挑戦したタンポポコーヒー作り。根を掘る作業から始めたことで、味や香りで味わうだけでなく、全身で体感した。歩いている地面のなかでは、一株一株がそれぞれに根を伸ばしている。そのひと欠片が凝縮された一杯を味わったということは、春を丸々体に取り込んだかのようで不思議な感覚だ。今も地中ではあの根たちがひそやかに伸びているのだと、そっと地中に思いを馳せる。

都留市の旧5町村を巡る
（5）旧盛里村

蚕の神様を祀る蚕影山

朝日馬場の蚕影山の祭りのようす。石でできた祠が蚕の神様

1954年4月29日、旧谷村町、宝村、盛里村、禾生村、東桂村が合併して、都留市が誕生した。「都留市の旧5町村を巡る」では、各地域を渡り歩き、気になる人やモノから、その地の風土を探っていく。
最終回は、養蚕の成功と発展を祈り神様を祀ってある山、「蚕影山」がテーマ。蚕影山信仰は、養蚕を営んできた地域では全国的に浸透しているもの。旧盛里村にある蚕影山から、過去の信仰の姿と現在の関わりを見つめてみた。

地域で励ましあう生業

蚕の神様を祀ってある山を蚕影山と呼ぶ。本来の山の名前とはべつに、そう呼ばれているようだ。

4月21日、訪れたのは旧盛里村与縄地区の蚕影山。ここは都留市でも有名なところである。西国三十三観音信仰に由来する三十三体の石仏が山の入口から頂上にかけて設置されているからだ。石仏の前を一体ずつ通り抜け、登って行くこと約10分で開けた場所に出る。そこに、蚕の神様を祀った祠と小屋があった。養蚕を営む人々は、一年に一度、蚕影山で養蚕の発展を祈る祭りをおこなっているのだ。

この祭りについてお話をしてくださったのは、与縄地区に住む臼井昌重さん（78）。蚕の供養と感謝をし、養蚕の発展を祈願することが祭りの目的であるという。それともうひとつ、養蚕を営む家庭が大半を占めていたため、互いに励まし合う機会としてきたこともわかった。

「（祭りは）人間が生活をするための糧」と臼井さん。養蚕が生活に根付いた仕事であり、それが地域全体での取り組みであったからこそ蚕への感謝を忘れず、また人々は声をかけあい、歩んできたのだ。そして、その象徴が蚕影山でおこなわれてきた祭りである。これまでは、4月16日に蚕影山で祭りをおこなっていたが、最近は4月の第2日曜が一年に一度の集いの日となっている。

（5）盛里村

明治8（1875）年に、旧朝日曾雌村、朝日馬場村、与縄村の3ヶ村が合併して誕生。村名は、村勢の繁栄を願ってつけられた。

「こんぼうまつ」

与縄地区の蚕影山を一緒に案内してくださった朝日馬場地区の清水一夫さん（64）から、毎年5月5日には、朝日馬場地区にある蚕影山で祭りがあると教えてもらった。まだお菓子がたやすく手に入らなかった、清水さんの子ども時代は、お菓子目当てに子どもも祭りに参加していたという。ただ、養蚕が衰微した今、祭りを担うのは毎年交代の当番役

の人くらいだ。

5月5日、今度は朝日馬場の蚕影山を訪れた。与縄地区の蚕影山もそうだが、地元の人に案内されない限り、どの山が蚕影山で、どこから山中に入っていけばよいのかわからない。朝日馬場地区の蚕影山は、地元の人にはこんぼうまつと呼ばれている。蚕影山と呼ぶよりは、こんぼうまつと親しまれているという。

いつから、どのような雰囲気の祭りがおこなわれるのだろう。そう思いながら、10時過ぎに清水さんと蚕影山へ歩く。石船神社の近くで出会った地元のかたたちが山の中腹を見上げ、「幟(のぼり)が立ってるね」と言う。よく見ると、緑のなかに白い線が見えた。それを確認したのち、近くに集まっていた10人ほどの人たちと山を登る。5分もしないうちに目に飛び込んできたのは、麓で見た白い旗と、料理やお菓子を振る舞う地元のかたがたや参拝者など、20人ほどの人。奥には石で作られた祠があった。地元のかたがたと同じように、お神酒やお赤飯、お菓子などをいただきながら、蚕の神様に手を合わせた。昨年は当番役の人くらいしかいなかった祭り。今年は偶然にも、子どもからお年寄りまで多くの人が集まったようだ。

はじめは、地元のかたがたの集いに突然参加することに遠慮があったが、みなさん優しく接してくださった。お参りが済んだら、すぐに山を下りる人もいれば、シートを敷いて談笑する人の姿も見られた。

地域固有の文化を受け止める

蚕影山の祭りのなかから、おそらく本来の目的である蚕への感謝や成功を祈願するという姿勢は薄れているだろう。けれど、外から参加した私には、一年に一度蚕影山のもとに集まりお参りするひとときが大切な時間に映った。蚕影山には、個々に留まることのない地域全体で共有されていた養蚕への心が宿されている。盛里の歩みが、養蚕とともにあったことをうかがい知ることのできる貴重な風習である。この風習は、先人の暮らし、ひいては地域そのものを支えてきた養蚕を理解し受け止める意味をもつのではないだろうか。今は本来の意味が込められていなくても、地域の人が身近な風習に目を向け続ける限り、地域の文化を語り継ぐ方法はたくさんあるように思える。また、私たちが受け止められることも数多くあるだろう。

その地域の人にしかわからない信仰やその対象はきっと数多くあるだろう。そこには、私たちがその地域の「個」を知るかすかな手がかりがある。今も残る蚕影山への集いは、地域の文化を肌で感じ取れる機会なのだ。

崎田史浩（本学社会学科卒業生）＝文・写真

朝日馬場の蚕影山に立てられていた幟。蚕の字が「神の虫」となっている

蚕の神様の祠。お賽銭や米、お神酒が置かれている▶

第7回

起き上がる朝

―女学校へ行くまでの経緯（いきさつ）―

2011年秋から、私たちは都留市にお住まいの遠藤静江（えんどうしずえ）さん（80）に聞き取りをおこなっています。遠藤さんは子どものころに戦争を経験し、のちに40年間教員を勤めたかたです。現在も創作活動などに精をだしている遠藤さんの生きかたに迫ります。

4月22日、今回は遠藤さんがなぜ教員になろうと思ったのかを切り口に、女学校に入学するまでの経緯について伺いました。

教員になったっていうのは、もう子どものときから先生に憧れてたの。

子どもっていろいろ「ごっこ遊び」するでしょ。その時、学校ごっこするの。そして、自分が先生になるの。おもしろいのよね。柿の木の枝に黒板を吊る下げて、そんでいらない紙をみんなちいちゃく切って、鉛筆渡して、足し算させたり、丸つけたりね。

そのころの子どもの遊びってさ、ほとんど工夫して、あるもので遊んでたの。なにをするにも。だいたい自然と向き合ってたでしょ。竹の棒だとか木だとか、草だとかね、そういうものがほとんど遊びの材料になったの。みんなほとんど遊びっていうのは、そこにあるものが材料ね。身の回りにあるものを工夫しながらそれで結構楽しく遊んでた。

私、先生になりたくて、みんな、同じくらいの子どもたちが集まって、そして（学校ごっこ）したのね。みんな言うこと聞くの。ちっちゃいこっち（幼い子どもたち）。でね、極めつけは、「もう先生はこの学校を終わってほかの学校へ行きます」なんて言ったのね。ほかの学校へ転勤する先生は、みんな駅まで送ってくのよ。そうすると先生が、ハンカチで涙を拭きながら、窓のところで見るの。そうすると子どもがみんな「先生、さようなら」って先生が見えなくなるまで手を振るの。それが、なんか子ども心にも最高の場面みたいな感じがしたのね。

遊んでいるところだって、平らなところと高いところあるでしょ。そうすっと、子どもが平らなところにいて、先生がさよならってちょっと一段高いところにいて送るの。自分が先生になったような感じでね。そんなふうにして子どものときから先生になりたいなあっていう希望はあったのね。

集団疎開があったころ

私たちの時は、小学校の6年が受験なのよ。昭和20年って。その上は、女子の場合は女学校。男子の場合は中学校。そういうふうになってたの。だから6年の受験てものすごく厳しかったのね。ちょうど昭和20年っていうと、戦争が激しくなったでしょ。だから都会の子どもはみんな田舎に疎開してくるの。戦争が激しくなって都会にもいられないでしょ。集団疎開というのがあったのね。学校全部で田舎へ疎開する。それから、縁故疎開ってのは

親戚を頼ってくるとか。だから一クラスが45人くらいなのが、最後は50人以上になるの。今みたいに一人がけの椅子とかじゃないから、長い椅子、机も長いのね。3人がけにするとか、そんな感じだったのね。

で、受験するんだけど、50人くらいで受かるのが一クラス15人、いないのよ。そのくらいみんな落ちるの。

勉強するんだけども、電気つかないの。戦争中でね。灯火管制っていって（電気の）上から覆いを被せて、明るいのがその下だけなのよ。それが時々停電になるの。外へ出たら真の闇。

戦時中のようすを話してくださる遠藤さん

だけど、受け持ちの先生が自分の学級の子どもの合格率をよくしたいから、ものすごく頑張るのね。先生っていうのは、一国一城の主みたいに自分の生徒をみんな受験に強くしたいから、すごく頑張るの。

私が教わった先生もすごく頑張り屋で、受験のための勉強してくれるの。それが、ここ（学校）でするんじゃなくて、友だちの家を借りるの。そして夕飯食べると、そこへ受験する人がみんな集まるの。

口答試問の対策法

その当時の勉強っていうのは、ほとんど受験は口答試問なの。筆記より口答試問が主体。向こうで何が出るかはわかんないのよ。だから先生が出そうな、たとえば数学なら数学で、こういう問題が出そうって言うの。口答試問でみんな一晩に、50問以上なり１００くらい書くのね。国語でいえば、誰々の詩は知ってますか、言ってご覧なさい、とか。

そういう質問があって、答えを書いてっていうふうに、ぜーんぶそれをノートへぎっしり書いて、だいたい夕飯食べて、行って帰ってくるときはもう12時ごろなの。だけど、12時ごろでも電気つけちゃいけないの。だからね、夜、道があるでしょ。電信柱がたってるよね。空のなかに微かに黒い電柱がわかるでしょ。そうすっと、ここが路肩だなっていうのがわかる。そこを見ながら家まで歩くの。もちろん親の送り迎えなんて一切ないよ、6年生で。自分で行って自分で帰ってきて、帰ってきてから先生が出した問題をもう一回清書するのね。次の日までに。

そういうふうにして、そうねえ、ちょうど10月ごろから（受験勉強が）始まるね。そして3月の10日ごろが試験だったの。そこまでずーっと続くの。でも、そういうことを先生、一生懸命してくれたの。無料で。

東京大空襲が、昭和20年の3月10日、11日あったのね。その空襲のさいちゅうが受験だったの。2日間あるのよ試験は。私たちの場合は今の谷村第一小学校が私の学校で、その上に市役所がありますよね、あそこが女学校だったの、昔は。今、市役所だけどね。だから距離は短いわけ。学校から、あるいは受

遠藤さんが６年生のときに使用していたノート

験に行くにも。

口答試問と、あと体育の実技があるの。跳び箱とか、小学校でも。手旗信号っちゅうのがあるの、体育のなかに。今でも覚えてるよ。その手旗信号をこっちで送ると、そのむこうで、それは何を言ってるかって受けとる。それから、モールス符号ね。それを読み取ったり、聞き取ったり。そんなことも戦争中の勉強の中身だったのね。

戦時中の衣食

ところが勉強していられないのよ。だいたい決まった時間にB29、B29っていえば、たとえば、（机におぼんの大きさくらいの円を描きながら）これがB29だとすると、日本の飛行機は豆を一つ置いたくらいの大きさなの。それくらい違うの。おぼんに豆。それ（B29）が、富士山のほうからがーっと来るの。だからもう、勉強してもすぐ防空頭巾を被って、救急袋を持って、みんな谷村第一小学校の前にある長安寺山へ逃げるの。だから勉強っておちおちしてられなかったのよね。

そして放課後とか、午後の時間になると、グラウンドが全部畑で、そこへマメ蒔いたり、イモを蒔いたり全部そうするの。それから、川原を掘ってそこへサツマイモ蒔いたりとかね。それから、農家が忙しくなると、勤労奉仕っていってみんなお手伝いに行くの。

食べものもなくてね。お弁当持ってこられる人はね、50人くらいでも10人っくらいっきり（10人くらいしか）いないの、だっておかゆだもの。おかゆとかそういうものだったら持ってこられないでしょ。お弁当箱に入らないでしょ。だから、お弁当泥棒っていうのもあったのよ。みんなが体育へ出ていると、こっそり誰かが部屋のなかへ来て、お弁当食べちゃうとかね。みんなお弁当持ってきたっていっても、そこで10人くらい食べれる人は、サツマイモとか、ジャガイモとかそういうものなのよ。食べられるものは。ちゃんとした食べものがなかったのね。

着るものだってね、その当時の着るものは、ほとんど新しいものってなんにもないの。うちなんか母親の着ていたものをみんな解いて、私たちの洋服をつくってくれたり、編みものね、いらないもう古くなった毛糸とかセーターとかもそういうものでつくったの。ほとんど大変でね。

父が戦地へ

私は5年生のときに父親がね、みんな知ってるかしら、赤紙って召集令状が来て。それが11月に来たのよ。私が一人で家にいて、そうして家族はみんな、うち農家だったのね、だから稲刈りしてたの。そこへ持ってきたの。私はすごく驚いてね。私長女だったから、それがどういうものかっていうのは、ものすごくよくわかってたの。

そのころの農家の子どもっていうのは、運命共同体よ。だからもう家族として、ちっちゃい人はちっちゃいなりにみんなお手伝いっていうより仕事だね、仕事をしてたわけ。分担して。

だから経済的なこととか、そういうことも、ものすごくよくわかったの。父が行ったらこの家はどうなるとか。父親が5年生の時に行っちゃったとき、そのまま出征しちゃったのね。家は結局、年寄りのおじいさんとおばあさんと母親と子どもが4人、という生活だったの。これは厳しいよね。働く者がいなくなってるでしょ。

昭和二十年――終戦は、その後の私の生き方の原点になりました。

信じきっていた価値観の百八十度の転換は、真理は一つであるという盲従の中から立ち上がらせることと、求めることを教えました。

とは言うものの、それらを育て満たすには、あまりに貧しい時代が続きました。物心両面の飢えがバネになり、希求する心は、かえって強くなりました。私というこの一人の人間を、どう育てて行くか、と言う課題は、私が教育という仕事にたずさわる中で、人間の可能性を信じて止まないことと根っこはひとつです。

それらは又、私個人の中で達成出来るものではない事を、いやと言う程、体験させられました。それは、私の考え方や行動の柱となってきています。

――『昭和20年入学（谷村高女 同級会記念文集』（昭和57年6月27日作成）より、遠藤さんの文章を一部抜粋

女学校２年の時の遠藤さん

そしたら、私教員になりたかったけど、女学校へ行けなくなっちゃったの。経済的にも家のことしなきゃなんないっしょ。私が一番上で、下がまだ1歳にもなんない。だからおじいさんたちが、女学校へ行けないって言ったの。で、私がちっちゃいながらも絶対先生になりたかったから、すごく泣いて大騒ぎしたのね。

女学校へ行きたい

でね、ここの町のことをそのころは道生堀（どうしょうぼり）といっていた。それから桂川があって院辺（いんべ）橋のむこうがね羽根子（はねこ）っていうの。こことここの村は一つの村みたいだったのね、その当時。

私のおじいさんが、「むこう村とこっちの村を併せても、うちよりもっと裕福な家があるけど、いままで誰も女学校へ行ってない」って。「誰もいままで過去に行ってないから、うちなんか今こんな状態だから、行くことない」ってね、そう言ったの。それで私はもう、すっごいねえ、泣いてね。絶対行きたいって言って。

そしたら私の父に、受け持ちの先生が手紙やってくれたの。「静江さんが女学校へ行きたいって言ってるから、なんとか願いを叶えてやりたいけれど」って父に手紙をやったら、父が戦地からあの、戦争に行ってても向こうでもいくらかお金もらうらしいのね、軍隊でも。そしたら、そういうお金を工面しても（学校に）やってくれって言って、手紙よこしたの。そしたらその手紙が、ものすごく効き目があって。おじいさんもみんな、その手紙を先生が持ってきたから納得して、行くことになって、それで受験したの。だからそこのところで私の人生っていうのは、もしそこで女学校へ行けなかったら、全然違った人生になったと思うの。

幼少期の遠藤さんにおこったできごとと、戦時中の日本の状況

時期	遠藤さんのこと	日本の状況
昭和14	谷村尋常小学校入学	
昭和16	「谷村尋常小学校」から「谷村国民学校」になる	第二次世界大戦が勃発
昭和18	父が出征する	
昭和19	受験勉強をはじめる	集団疎開がはじまる
昭和20	試験日（3月10、11日） 谷村高等女学校へ入学	東京大空襲 第二次世界大戦が終戦

富士道を歩く 2013

城南公園から普門寺まで

牛丸景太（国文学科４年）＝文・写真

一本の道をじっくり歩きながら、土地の歴史や民俗を探求する。それが、「富士道を歩く会」だ。昨年５月に大月市を出発し、目指すは富士吉田市の「北口本宮冨士浅間神社」。毎回３時間ほどを目安に、案内役の都留市郷土研究会の皆さんと古道を辿っていく。

３月24日（第８回）は城南公園から出発し、新町と早馬町の境界である通称「十一屋横丁」を抜け、金比羅神社や天神社、ついで西願寺や金山神社などの富士道周辺の寺社を巡りながら、立体交差している珍しい水路を見つつ普門寺までを歩いた。

富士道 旅録

石灯籠がつくられた理由

1803年（享和３年）、江戸幕府は全国に地誌編纂の内命を下し、甲斐国では『甲斐国志』が編まれた。私がこれまでにも何度か目にしていた天神社の石灯籠は、この地誌の編纂に関わりあるものだった。そのモノをただ見ているだけでは読み取れないものを、郷土研究会の皆さんに教えていただいた。

天神社入口の門柱を過ぎ、境内へと続く階段を少しあがると、一つの石灯籠が見えてくる。もともとは階段の両側に置かれていたようだが、すでに片方は失われて土台のみが残されている。

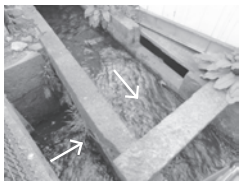
ここへは何度か足を運んだことがあった。石の灯籠自体いたるところで見られるから、さほど珍しさも感じない。けれど、ここの灯籠はほかとは少し違うらしい。建てた人たちの願いがはっきりと分かっているのだという。

竿部（長細い柱状の部分）を見ると、うっすら「願主 森嶋其進 門人中」と刻まれている。聞けば、森嶋其進（1761～1821）は現在の都留市下谷の人で、生家は下谷村の長百姓という村役を務めるかたわら絹商をしていたそうだ。名前は一般的に「キシン」と音読みされるが、本来は「もとのぶ」ではないかと考えられている。甲斐国の代表的な地誌『甲斐国志』の編纂に携わった人物のひとりで、とくに郡内地方の担当を任された人であった。

天神社の石灯籠は、そんな彼に教えを

今回訪ねた場所

【普門寺門前の水路】
家中川の余り水を桂川に落としていた。戦前はアヒルを飼ったり、友禅流しをしたりしていた
写真＝『奥隆行写真コレクション』



【水路の立体交差点】
現在は暗渠（あんきょ）になっている中川（上矢印）と、寺川から引いた灌漑用水（下矢印）が交差する地点。江戸時代からすでにこのような立体交差点になっていたらしく、ほかにあまり例がない珍しい造りだという

【西願寺前を流れる寺川】
橋の長さが護岸工事される前の川幅を伝えている。以前はバイカモがたくさん生えていた

▬ ▬ ▬ ▬ かつての富士道のルート

受けた門弟によって建立されたものだった。同じく竿部に刻まれた碑文によれば、『甲斐国志』完成の前年にあたる文化十年（1813）に奉納されている。弟子たちは作業が大詰めに差しかかるころ、師匠の編纂成就を学問の神様に祈ったのだ。「最後は神頼みだったんだよね」と、郷土研究会の内藤恭義（ないとうやすよし）さん（81）が微笑む。幕府から命（めい）を受けて始まった事業だけに、地誌づくりはかなり重圧のかかる仕事だったに違いない。

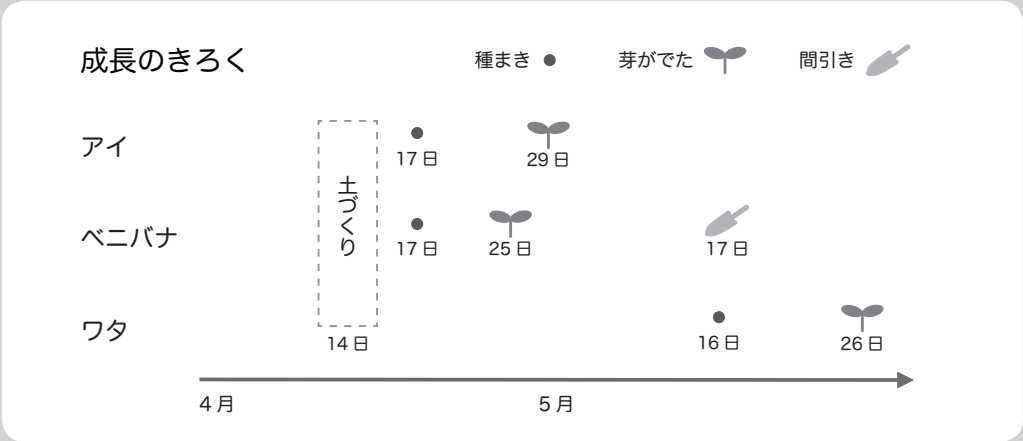
今からちょうど二百年前。この地域の地理や風俗、習慣や伝承などの記録に心血を注いだ人がいること、そしてその支えになりたいと願った人たちがいたことを、天神社の石灯籠から知った。

「願主 森嶋其進 門人中」と刻まれた竿部の碑文。向かって右側面に年号、左に世話人の氏名が刻まれている

アイ、ベニバナ、ワタの種を蒔きました

中屋敷フィールドで昨年から耕している畑に新しく畝（うね）をつくり、アイとベニバナ、ワタの種を蒔きました。アイとベニバナの種は４月17日に、ワタの種は５月16日に蒔きました。育ったものを使って、今年は染めものに挑戦したいと考えています。アイとベニバナの種は、本誌連載『起き上がる朝』でも取材している遠藤静江さんから分けていただきました。鍬（くわ）をつかって自分たちの手で畝をつくるのは想像以上に重労働で、１時間ほど耕しただけでも両手にマメができました。蒔いた種は夏にかけてぐんぐんと成長していくでしょう。青々とした作物が畑いっぱいに育ってくれることを願いながら、これから中屋敷フィールドの畑のようすを追っていきたいと思います。（前澤志依）

種を蒔き終えた畑のようす



駅の展示を貼り替えました（5月11日）

都留文科大学前駅の待合室の展示替えをしました。色のバランスや見やすさを考えながら計８枚のパネルを交換しました。駅に訪れたさいにはぜひ、この展示パネルに目を通していただきたいです。駅の休憩スペースは木のぬくもりが感じられる心地よい場所です。この空間をより良くし、より多くのかたに利用していただくため、編集部の一員として展示に力を入れていきたいです。（舟田早帆）

私たちのおすすめする記事をパネルで展示

Field・Note News 2013.4-5.

フィールド・ノート ニュース

2013年4月から5月の『フィールド・ノート』
編集部の活動のようすや出来事をお伝えします。

『フィールド・ノート』編集部＝文・写真

小野神楽を観てきました（4月14日）

都留市小野にある蚕影（こかげ）神社の春祭りが開催され、本誌76号で取材をした小野神楽が披露されました。太鼓と笛、歌に合わせてゆっくりと滑らかに舞ったり、力強い曲調になると一つひとつの動きに張りをつけて舞ったりと大変迫力のあるものでした。私を含め春祭りに参加した地域のみなさんが神楽に釘付けでした。今後も小野のお祭りなどで小野神楽が活躍することでしょう。私もまた観に行きたいと思います。

（前澤志依）

力強い舞いが特徴の小野神楽

ムササビライブカメラのメンテナンス（4月18日）

木の上から巣箱を下ろす

キャンパスの東側のムササビの森に設置してあるムササビライブカメラのメンテナンスをおこないました。2009年から始めたムササビライブカメラの取り組みは今年で5年目になり、毎年巣箱に入ったムササビのようすを、本学自然科学棟や学生食堂に設置したモニターで観察しています。今年は下ろした巣箱のカメラを取り替え、10月に再開する予定です。ムササビライブカメラの映像は本学のWebサイトでもご覧になれます。

（砂田真宏）

ビオトープ活動開始（5月10日）

富士急行線 都留文科大学前駅の隣にある三ノ側ビオトープで、ヒャクニチソウの種を蒔きました。今年度のビオトープ活動の始まりです。ヒャクニチソウは花期が長く、チョウが吸蜜にやって来るビオトープにはぴったりの花。咲いたときのことを想像して、間隔をあけながらきれいに種を蒔いていきました。これからの季節、チョウなどの生きものの集まるにぎやかなビオトープになっていくのが楽しみです。

（鈴木陽花）

列になるよう溝に沿って種を蒔いていく

FIELD NOTE
no. 77 Jun.

発行人
北垣憲仁〔26-29〕
統括編集者
西教生〔6-7,30-31〕
編集長
牛丸景太〔4-5,12-13,18-22,42-43〕
前澤志依〔8-13,38-41〕
副編集長
深澤加奈〔2-3,12-17,23〕
別符沙都樹〔1,34-35,48〕
編集
鈴木陽花〔24-25,44-45〕
砂田真宏〔32-33,46-47〕
編集補助
廣瀬はづ紀
伊藤瑠依
加藤萌香
金原由佳
川田陽香
舟田早帆
森本楓
ロゴデザイン
工藤真純

〔　〕は編集担当ページ

編集後記
ふるさとを思い出すとき

たくさんの花がつぼみをほころばせる春、通学途中に鮮やかな赤紫が目に留まりました。ぼたんの花です。実家の庭にもあるぼたんが大好きで、枝がしなるほどの大輪を咲かせる日を、毎年祖母と一緒につぼみの数をかぞえながら指折り待っていました。今年は開花の時期に帰省できず、親に送ってもらった写真でしかぼたんを見られませんでした。それが何だか物足りなくて、来年こそは見てやるぞと今から決心しています。（別符沙都樹）

うす暗くなってくるころにアパートへの道を歩いていると、どこからか晩ごはんの匂いがしてきます。そういうときにふっと、実家を思い出します。一人暮らしを始めて、毎日３食用意してもらえる有り難さを知りました。ちゃんと食事をとらない日があると、母を思い出して後ろめたくなってしまうのは、きっといいことなんですね。料理の腕は相変わらず上がりませんが、自分の健康は自分で気に掛けられている私です。（深澤加奈）

えひめが私のふるさとです。つい先日、本学附属図書館の階段で地元の方言を聞きました。ほんの少しだけ聞こえた「松山空港」という言葉からも、愛媛県出身の人もしくは愛媛にゆかりのある人なのだろうと思います。都留へ来てほとんど聞くことのなかった愛媛の方言が何だか懐かしく、ふるさとを思い出しました。こんなにも方言を聞いてうれしくなったのは初めてです。次に帰省するのは７月の終わりころでしょうか。また違った思いで方言が聞けそうです。（砂田真宏）

FIELD･NOTE（フィールド・ノート）77 号
発行日：2013 年 6 月 21 日
発行部数：2500 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下 1 階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下 1 階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

©2013『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

次回予告

特集
ものが語る
ものがたり

手植えの田んぼ

昼下がりの十日市場
田んぼに稲が植わっていました
まっすぐに植えられた苗
手で植えたのだそうです
たしかに稲の植えられているところには目印に引いた線の跡がありました
この交わった線と田んぼのなかの足跡が
珍しくなった手作業をものがたってくれます

FIELD・NOTE　78 号　2013 年 8 月発行予定

野生を育む GrowWild
都留文科大学
フィールド・ミュージアム
Decent Wildlife and Our Community

FIELD·NOTE no. 77

発行日 2013年6月21日（年4回発行）
発行所 〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1　都留文科大学　コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター　フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部